

G. A. クリモフ著「内容類型学原理」についての覚書

石田 修一

はじめに

クリモフの一連の諸研究の中で、内容類型学に直接関係する最も重要なモノグラフを挙げるとすれば、それは、「能格性総論概説」(Очерк общей теории эргативности) 1973、『活格構造言語の類型学』(Типология языков активного строя) 1977、「ソ連邦における類型学研究 (20-40 年代)」(Типологические исследования в СССР [20-40 годы]) 1981、「内容類型学原理」(Принципы контенсивной типологии) 1983、「比較言語学要理」(Основы лингвистической компаративистики) 1990 であろう¹。

この内ここで取り扱う「内容類型学原理」は、30-40 年代のソヴィエト「新言語学」潮流の継承者としてのクリモフ(1928-1997)が 90 年代初頭の時点までに到達していた構想の総括だと考えられ、その限りでの結論を知る上で最も重要な著書である、と本稿筆者は考えている。それは、第一に、「能格性総論概説」や「活格構造言語の類型学」に比して出版年が新しいこと、そのことに関連して第二に、はじめの二つの著作で主張あるいは仮説として述べられた見解等に、その後の知見に合わせた修正がなされているからである(しかも本稿の筆者の知る限りでは、本書以後 90 年代にはそのような修正はおこなわれていない)。修正されたのは大きくは次の四点である。① 能格性原理一般、能格動詞の語彙化原理に対する認識の修正、またそれに関連する修正 [p.95, 101, 111, 112, 121]、例えば、能格言語に機能する動詞の、他動詞—自動詞という用語から行為主 агентивный (agentive) — 事実主 фактививный (factive) 動詞という用語への修正²、② 「中立型」

¹ 「活格構造言語の類型学」については、「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」(三省堂 1999)と改題して、また「ソ連邦における類型学研究 (20-40 年代)」については、科研報告書「ロシア・ソヴィエト言語類型論研究」(代表者柳沢民雄 2002)に、それぞれ拙訳がある。なお、カフカス学者としてのクリモフには、特筆すべき重要な業績、例えば、「カルトヴェリ諸語語源辞典」(Этимологический словарь картвельских языков) 1964、「カフカス諸語の類型学」(Типология кавказских языков) 1980、「カフカス言語学概論」(Введение в кавказское языкознание) 1986、そして未完の「カルトヴェリ諸語比較文法概論」(Очерк сравнительной грамматики картвельских языков) 1998 等々があることは勿論である。クリモフの業績については上記三省堂拙訳の巻末に赤井規晃氏による「G.A.クリモフ博士業績目録」が、また上記科研報告書には、同氏による「ロシア・ソヴィエト類型論研究のための基本文献目録」がある。

² 「能格性総論概説」(1973 年)の段階では、能格言語に機能する動詞の語彙化原理について、「他動詞—自動詞特徴による」、「主格構造における動詞の対立を表す時の用語とはホモニムであるが、誤

類型の削除 [p.79, 87, 88, 114]] (70 年代初め能格構造とは異なる活格構造の析出に成功したクリモフ等の同時的課題およびその後の課題は、活格言語も含めた諸類型を歴史的展望の中に位置づけることであったと思われるが、その試みの中で作業仮説として類別型の前段階として「中立型」言語類型を仮説し、前の著作では、中立型→類別型→活格型→能格型→主格型という段階展望が提示された)、③ 内包形と排外形を包含事象 implication とする類型所属先の変更 [p.145] (前の著作では、活格構造組織の包含事象として構想された)、④ 活格言語の二方向発展の起因を巡る修正 [p.202] (前の著作では、動詞に組み込まれる接辞の単人称性か二重人称性を起因と仮説)、である³。さらに本書の第三の意義は、能格、活格言語の記述に焦点を絞った前の著作とは異なって、内容類型学の原理的方法論一般 (その核心は、類型概念の明確化、体系性と歴史主義の原則、あるいはまた形式と内容の弁証法の重視) についての主張の展開と活格、能格、主格型を含めた諸類型の史的連続を展望した鳥瞰的な視点での記述が際立っていることである。恐らく、クリモフがこの歴史的展望を記述する際に使う「進化」эволюция [evolution] あるいはまた「段階位相」(фаза [phase]) あるいは「発展段階」(формация [formation]) という用語は⁴、いわゆる「経済的社会構成体」общественно-экономическая формация [economic formation of society] という概念にも比定することができると思われる。第四に、現今の欧米等の言語学潮流 (グリーンバーク、コムリー、ディクソン等々) に対する具体的批判等が随所に展開されている点でも興味深い。何れにせよ、少なくとも本書以後修正がなされていない限りにおいて、本書 (「内容類型学原理」) はクリモフ等が到達していた内容類型学構想の、90 年代初めまでの総括的モノグラフである、と考えることができよう。

本書は、序、第 1 章 内容類型学の一般原理、第 2 章 内容類型学的言語分類の問題、第 3 章 内容類型学研究の歴史的側面、結語、英文サマリーから成る。以下は、本稿筆者の観点からする覚書 (ただし結語と英文サマリーの部分は除く) である。

なお、原文には以下の目次はなく、以下は本稿筆者が作成した目次である。また以下

解を生むはずはない」、という趣旨を述べている (同書 p.68-69)。「活格構造言語の類型学」(1977 年)でも、このホモニム用語法は継承されているが、そこでは A.E. キブリクの提案とし agentive-factitive という用語を取り上げている点で (拙訳「新しい言語類型学」p.46, 137)「能格性総論概説」の修正が窺われる。agentive, factitive の訳語は、当面仮のもの。

³ これ等の修正に関わる「新しい言語類型学」(三省堂)の該当箇所はそれぞれ、②(p.243)、③(p.216-217)、④(p.161, 185-186)、他を参照。

⁴ 拙訳では概ね、фаза には「段階位相」、ступень, этап, стадия, уровень とその派生語には「段階」、формация には「発展段階」を当てている。

目次中の右側の数字は 本稿の頁 [原文の頁]を示す。また本文中の() []中の数字も原文の頁を示す。

目 次

序	内容類型学とは何か 57 [4]
	内容類型学の発展を阻害する四つの事情 57 [5]
第1章	内容類型学の一般原理 57 [9]
総論	内容類型学の系譜（内容類型学に繋がる学史） 57 [9]
	主体・客体関係の基準に至る過程 58[15]
	類型学と起源言語学、地域言語学、言語性格学、対照言語学、言語普遍論 58 [18]
	言語類型、類型種、言語内類型 59 [23]
	類型基準の恣意性批判 [25]－類型の純正性[30]－混合類型 [30]－総体系性（階層的構造特徴総体）[32]
各論	内容類型学固有の問題群 62 [34]
	① 形式類型学と内容類型学の峻別の重要性和峻別への無関心から来る混乱例 62 [38]
	② 主体・客体関係基準の発見は恣意的でない（その基準の発見過程）63 [41]
	③ 階層的呼応特徴総体の中での音素レベルの位置づけ、各類型組織固有の位置格と格組織の関係 63[43]
	④ 類型と類型種概念の無理解から来る分離能格性等の認定の誤り 64 [51]
	⑤ 言語と思考の関係 65 [53]
	⑥ 類型基準を巡る現代類型学の二大潮流、諸傾向とその批判 65[56]
第2章	内容類型学的言語分類の問題 69 [75]
	四類型[79] コード特性と類型表 70 [84, 86, 87]
	各類型内の縦断的（体系的、階層的）特徴 71 [79]
	類別型 71 [80, 88]
	活格型 72 [80, 91]
	能格型 74 [81, 95]
	主格型 78 [82, 105]
	各類型の意味的決定因子、特に能格性の問題 80 [110]
	各類型間の横断的特徴（四類型間の相関性、連続性）81 [112]

① 意味的素因子(semantic primes)の相関図(Dixon 図式への修正)81[112]

② 各類型諸特徴の相関性、連続性 82 [115]

類型的距離 (типологическое расстояние) 83 [122]

混合・分裂タイプ; 分裂のあり方議論 (Dixon 批判) 84 [123]

第3章 内容類型学研究の歴史的側面 87 [138]

類型学の本質は通時面 通時類型学(史的類型学)の重要性 変化と発展 87[138]

通時類型学の理論と方法 80 [143]

体系性と歴史主義(歴史主義の前提としての体系性; 体系性と歴史主義原則の一体性) 88 [143]

歴史主義 不可逆的構造変化 88 [147]

再構法 補外推論(extrapolation) 類型学の自立的再構手順の必要性 90[152]

内的再構と比較的再構 90 [156]

通時的定数 (диахроническая константа) [149] 体系的再構 91 (cf. 89) [158]

最も一般的な原理—語彙の一次性と文法の二次性 転置 (transposition) 92 [160]

不可逆的發展の四つの論証集合 93 [169]

主格性の後発性、晩生性を示す諸事象 97 [177]

可逆説とその批判 99[188]

能格、主格型→活格型への可逆説 英語、タバサラン語 99 [188]

主格型→能格型への可逆 インド・イラン語、ポリネシア語、三つの研究 100 [191]

段階性説の今日の評価 102 [199]

活格言語の二方向發展性を裏付ける理論的根拠を巡って 102 [202]

有機的所有・非有機的所有範疇と求心相・遠心相範疇の相関性 103 [203]

改新の原基は動詞 103 [204]

段階的發展過程についての総括 104 [204]

結語 [206]

Summary [221]

序

先ず、内容類型学とは何か、という問題について次のように言う。言語の形式面を言語が伝達する内容の観点から考察する類型学、形式を内容との直接的関連で研究する類型学、「現象の形式と内容の相関関係における弁証法の理に立脚して、言語の形式面の、内容面による被制約性を追及することを前提とする」。内容に定位された類型学 (content-oriented typology) である内容類型学は、内容を捨象して研究する形式類型学に対して、ある意味で高度な研究であり、説明力がある。

内容類型学の発展を阻害する四つの事情を挙げる。①体系性と歴史主義の無視、②形式類型学と内容類型学の峻別不在、③ヨーロッパ中心主義 (主格構造のプリズムを通じた構造認定)、④類型学徒の努力の分散性 (研究者同士が相互にあるいは過去の研究者の到達済みの研究内容結果に無知)。

30・40 年代のソヴィエト類型学者の創造的遺産 (例えばメシチャニーノフ) を継承する必要性を強調。継承すべき遺産の核心は、体系性と歴史主義の原理の結合であり、この両原理の貫徹こそ言語類型学の発展の鍵である、と。

第1章 内容類型学の一般原理

先ず内容類型学に繋がる学史を、フンボルト、サピア、ケイペル、ミレウスキ、ペートリック、30・40 年代のソヴィエト言語学、現代欧米の関係文法・関係類型学等へと辿る。その中で、起源言語学すなわち比較歴史言語学は形式と内容の両面の有機的研究を行ってきたのに対し、類型学は、フンボルトの「音形式と概念形式相互間の正しく活発な相互浸透」というテーゼを指針としていたにも拘らず、結局、形式と内容を切り離す方向へ進み、その結果、形態分類タイプを生み出すことになった。その際、30・40 年代のソヴィエト類型学だけは、「内容なしの形式は存在し得ない」(メシチャニーノフ) として、内容に定位した類型学研究の重要性を自覚していた。現代の理論言語学も、形式に対する内容の第一義性というテーゼを裏付ける証拠を少なからず蓄積している。かくして、形式から内容へという方向性だけでなく、意味から形式へという研究方向を支持する研究者は多数にのぼる (ジョルベナゼ、キブリク、ブリュノ、イエスペルセン、シチュルバ [シシュルバ] 等)。そして、この方向性こそ、類型学研究に大きな展望を拓くものである。そして「意味的因子、すなわちある意味普遍 (概念範疇) の母集合 совокупностьこそが、異種諸言語の形式的手段を対比するための一定の基準 основания を見出させることになる。内容類型学研究において、すでに長期にわたって、このような基準

ориентир の役割を演じているのが現実の主体・客体関係である。関係文法の理論も、本質的にはこの関係にこそ起点をおいている」(p.14-15)。

ここで、この基準の発見に至る研究史が跡付けられている。初期の研究史として、ショールからマール、メシチャニーノフへと至るソヴィエトの学者達の「普遍的な意味の束ないしは意味群を明らかにしようとする実験」の「粘り強い試み」が記述され、次いで、内容類型学が「決定的な一歩」を踏み出した契機としてサピアが挙げられる。その例証として、「基本的な統語関係」についての、The farmer kills the duckling を例にしたサピアの有名な「時、場所、数その他については黙することもできるが、誰が誰を殺すのか、という問題は避けられない」、という主張が取上げられている。こうして、「現実の主体・客体関係の様々な伝達方法の中に言語の対比的な構造記述を構築していく上での発展的展望の基礎」があることの発見の第一歩は、「20年代までの言語学の状況全体によって準備されたものであろう」(p.16)。この発見の重要性は、その後のソヴィエト言語学でも急速に自覚される。その典型としてリフチンやジルムンスキーの発言—「言語の『文法核』の中心的关系が主体・客体関係である」(リフチン)、「主体・客体的基準を基にした類型論は、諸言語の中の本質的なものを掴む研究である」(ジルムンスキー)—を取上げながら、クリモフも、とりわけ「主体・客体関係こそが、言語構造内に、ほとんどその構造レベル全体に及ぶような著しく多岐的な投影組織網 особенно разветвленную систему проекций を敷いている」ことを強調している (p.17)。つまり、上記の「意味普遍の母集合 совокупность」の発見の歴史とは、言語構造の各レベルに広く投影組織網を敷く基準＝主体・客体関係という意味基準の発見の歴史なのである⁵。

次いで、類型学研究の前提条件として、類型学と他の言語諸科学との研究対象の異同性、差異について言及する。これらは何れも諸言語の構造的類似性を研究対象とするが、起源言語学(比較・歴史言語学)は拡散 (divergence) 過程、地域言語学は集約 (convergence) 過程に示される明確な事実集合における類似性を対象とするものであり、その研究の基準は厳密な確定性 (детерминированность)、目的意識性を持つ。ところが、これまで類型学の基準は極めて曖昧で振幅している。このままでは将来も、「言語的現実の種々雑多な過程を反映する多数の諸事実を無限にモデル化していく枠の中を堂々巡りすることになる」(p.19)。しかし、類型学も明確な目的意識性を有すべきである。類型学は、「言語の起源的同系性からも地域的類似性からも独立した独自の類似性の発展

⁵ 「類型」概念、「主体・客体関係」の基準の確定に至る研究史は「ソ連邦における類型学研究 (20・40年代)」にも詳しい(註1「科研報告書」p.261・264他第2章；原書p.33・38他第2章参照)。

過程」(p.19)を研究対象とすべきであるが、それは何か。ヤコブソンやメシチャニーノフを引用しながら、言語類型学が対象とすべきは、先ずは、「諸言語を一定の類型種(типологический класс [typological class])に統合せしめるような言語の同型性(isomorphism)である」(p.20)、ただし異型性(allomorphism)も勿論類型学の視野には入って来る。ところが一方、これは対照言語学、言語性格学(лингвистическая характерология)⁶、言語普遍論の視野にも入っているのだから、この同型性、異型性の異なる側面が類型学の対象だということになるが、対照言語学や言語性格学の場合は、後で定義するような「言語類型」の概念を必要としない、またそれとは無関係な所で類似的・非類似的構造特徴を比較検討するものである。例えばオーストリア諸語の「言語類型」とカイベリア・カフカースの「言語類型」等一定多数の言語に特徴的な現象の総和を指していう「言語類型」の概念は、ある種の性格学的な概念に属するが、類型学的な手順によらない印欧語的、ウラル・アルタイ的、ゲルマン語的、日本語的等々の「言語類型」という概念は形容矛盾(contradictio in adjecto)である。また、言語と自然および人工的信号組織を分かち、言語の最も一般的な構造的特徴の解明に照準を当てる研究は、言語的異型性を完全に捨象する限りにおいて、言語普遍論に属する。したがって、完全普遍の特徴は言語普遍論に属するが、不完全な普遍の中には類型的に関与的な普遍も非関与的な普遍も含まれるはずだ。

では、言語類型学がいう「言語類型」とは何か。クリモフは言う。「起源的語族の抽象的基準(すなわち祖語モデル)や言語連合のそれ(すなわち地域的に相関する諸特徴の集合)と同様に、言語類型(языковой тип)は、先ずもって、実際に立証されかつその用語で記述される諸言語の種類(класс [class])とは区別されなければならない。したがって、言語の類型(的)種(類)(типологический класс [typological class])が語族や言語連合と同じレベルの現象であるのに対して、言語類型は(языковой тип [linguistic type])は明確な構造体(конструкт [construction])—具体的な諸言語が一定の類型種に属することの診断基準となる構造特徴の集合体(совокупность)—である。換言すれば、世界の言語地図に現れる言語の類型種とは異なって、言語類型は類型論者が組み立てる概念(концепт[concept])である(……形式類型学では概して、この異なるレベルの観念の混同が起っている)」(p.24)。つまり、類型種という概念は、起源言語学における語族(起源の種類 генетический класс [genetic class])や地域言語学における言

⁶ マテジウスによる命名。cf. 山口巖「類型学序説 ロシア・ソヴェト言語研究の貢献」(京都大学学術出版会 1995) p.27-28

語連合（地域の種類 ареальный класс [areal class]）と同じ概念領域に属するものであるのに対して、言語類型という概念は、完全に、起源言語学における祖語モデルの概念及び地域言語学における地域的相関諸特徴総体（集合体）という概念のような抽象概念に属するもの、ということになる。以上のことから、類型とは、具体的諸言語の観察の中から取り出される諸特徴（その場合、起源的同系性や地域的同型性・類似性とは無関係に取り出される諸特徴）の類似性、同型性の抽象的基準モデルであり、こうした抽象的基準なしに類型学は存立し得ない。起源言語学も地域言語学もその理論構築において決して恣意的な基準によるのではなく「厳密に確定された基準」を用いているように、類型学も完全に確定的な基準原理を有するべきであるにも拘らず、これまで恣意的な基準を基にした類型論があまりにも支配的である。

クリモフは、白いという基準を基にして白人と白豚を一群化するような類型論を批判するヤコブソンの例えを引用しながら、グリーンバーグ批判等を展開しているが、それ以外にも形式類型学内で、恣意的に選択された、かたくなに言語の個々のレベルや局面にだけ基準を限定した類型構想は今も膨張し続けている。クリモフは、これを言語類型（языковой тип）の概念の、言語内類型（тип в языке）の概念⁷によるすり替えであると断じている。同一言語を選択する恣意的な基準次第で異なる類型種に分類するような「類型」を認めないのである。類型基準の取出しが恣意的であってはならない理由をクリモフは次のように説明する。「任意の言語レベルの構造特徴がさらに大きな呼応特徴組織に含まれているという事実を無視しては……その構造特徴の類型的関与性は確認できない」(p.27)、「言語タイプの構造特徴の集合体すなわち類型の弁別特徴の束に属すべきものは、論理的に相互に不可欠な特徴だけであって、自由に結合する諸現象ではない」(p.29)。つまり、個々のレベルの諸特徴が基幹的な意味核（意味的決定因子）の統率の下で相互に連係しつつ一つの全一的な構造組織体系を成すからである。これが、本書を通じてクリモフが再三強調している体系性（системность）の原理である。このようにしてクリモフは、類型、類型種、言語内類型という三つの概念を比較検討したのである。

こうして言語類型がその構造諸特徴間に相互的必然性を求める（あるいは予定する）ということは、類型概念が「純正 чистота」の原理に従うことを、すなわち類型の論理基盤の一貫性を意味していることになる。「言語タイプの『純正』の原理こそ、言語類型の内

⁷ 形態を基準にした類型、音韻を基準にした類型、等々を指す。現に、例えば「現代言語学辞典」(成美堂)には、類型論 (typology) の項目では、19 世紀の類型論として孤立、膠着、屈折、抱合型が、また 20 世紀の類型論として音韻類型論、形態類型論、統語類型論が紹介されている。

的 ratio を明らかにすることを可能にする」(p.30)。したがって、混合類型 (mixed type) という用語は形容矛盾であって、混合類型を主張する人は予め純正な型を頭の中で構想しているからこそ「混合」を主張するのであって、二つの類型の混合をある種の全一と規定し直しても、それは類型学には無用の余分な概念だと批判している。勿論、クリモフは、現実の具体的な言語に類型的に異なる諸特徴が混合していることは十分に承知しているのであって、それら具体的な諸言語の所属先については、純正で抽象的な類型基準を尺度として、ある一定の類型種を、したがって類型を認定しなければならない、と主張しているのである。メシチャニーノフはすでに 1934 年にこのことを、次のように定式化している。歴史的に交替していく言語諸類型は、「先行段階の状態の残滓的要素の歴史的な運動と保存という複雑な過程の中で諸特徴が部分的に層をなしてゆくために、完璧な一貫性を持つのは理論的構想においてだけである。言語の弁証法的発展の条件下では、純正な段階的代表言語は全く存在しないであろう」(p.31)。つまるところ、弁証法的思考で事態を捉える重要性が主張されているのである。言語類型＝言語構成体とその歴史的交替は客観的真理であって、その客観的真理は相対的真理の中にある、茫漠として一見無秩序に見える現実の中に相対的真理を発見すること、相対的真理を通じて客観的真理の道へ、というのが科学の道である、本稿筆者には、そのような意図が読み取れるように思われる。

上にいう言語類型の概念、そして構造基準の非恣意性の原理は、当然、言語類型の総体系性 (цельносистемный характер) という論理に連なる。いわゆるヴェグリンらの「総体系的類型学 whole system typology」という主張と通底するのである。上述のように、言語類型とは、ある一つの言語レベルを基準とするものではなく、語彙、統語、形態、音韻の各レベル全体の連係的に呼応する特徴の総体＝包含事象 (implication) の集合から成るものだからである。勿論、総体系性の要求は論理的な演繹に拠るだけではない。多くの言語の実際に記述された研究資料の多年にわたる蓄積によって、語彙組織の構造化原理が明らかになり、また語彙組織の、統語組織、形態組織、さらに形態音素組織との連係呼応性を証明する諸事実が確実に明らかになって来たのである。加えて、語における語彙的なものの一次性と文法的なものの二次性というという理論言語学においてはすでに一般化している立場からしても当然予想されることであるが、「語彙の分野にこそ他のレベルの個別の呼応特徴の最大集合を機能化させる、言語構造の根幹となる特徴がある」(p.34)、という予測は、すでに活格、能格、主格構造の実際資料を基に明白な裏付けを得るに至っており、言語構造体における、語彙→統語→形態→形態音素

間の階層的依存関係が、したがって総体系性が確認されている。

以上は第1章の核に当たる部分であり、いわば内容類型学原理総論であるが、次いで原理各論に（内容類型学固有の特殊問題群として）移って行く(p.37以降)。上記総論に示された問題群の具体化を旨としていると思われるが、反復強調の面も窺われる。次の諸点について記述されている。① 形式類型学と内容類型学の峻別の重要性とその峻別への無関心によって起る混乱例について、② 主体・客体的基準の発見は恣意的なものでないこと、この基準の発見の過程とこの基準から見た諸類型間の相関関係、③ 階層的呼応特徴総体、集合体としたときの音素レベルの位置づけ、各類型固有の格組織とその位置格の関係、④ 類型と類型種概念の無理解から来る分離能格性等の認定の誤り、⑤ 言語と思考の相関性の問題、⑥ 内容類型学の根本問題としての、言語類型の基準の問題と現代の内容類型学における内外の二大潮流、主要傾向とその批判。以下では、これ等（諸点）の内若干を取上げておく。

① 形式類型学と内容類型学の峻別は、類型学の発展の論理である。この峻別の忘却は混乱の元である。例として先ず、カフカース学者の間に広がっている無規定構文(индефинитная конструкция предложения [indefinite sentence construction])という概念が取上げられる。ある種の能格言語(バスク語やカルトヴェリ語)では、これが、能格構文や絶対構文と並行してそれと同じレベルの構文種として位置づけられているのである。主格と直接補語の格形式の不在(すなわち形態的無規定)を以て与えられる定義であるが、彼等のいうこの種の文は全ていわゆる「動詞型」文であり、名詞形態に主体・客体関係の表示がなくとも、その関係は動詞形に集中配置されることによって分明であり、「無規定」ではない⁸。

次いで、形式的アプローチによる体系性原理の無視の例として、ウブイフ語の「この人・馬・呼ぶ」の動詞「呼ぶ」の名詞補語は「馬」が斜格形を有するため仏語では他動詞に翻訳され、この形態面だけを基にして主格構文と認定する誘惑に駆られるが、ウブイフ語でも他のアプハズ・アディグ諸語でも「呼ぶ」は「自動詞」(絶対動詞)であって、名詞補語に斜格(＝能格)を取る事実そのものは、能格構造原理を貫徹しているに過ぎず、これは能格言語では通常の絶対構文である。その他オーストラリア諸語の構造認定における形式的アプローチの例も引かれている(→2章)。

⁸ cf. クリモフ「能格性総論概説」p.45；グルジア語 *šen* (君) *me* (私) *m·ake* (私を・誉めた)－カルトヴェリ語の1, 2人称代名詞は非曲用であるが、動詞接頭辞 *m·*は直接補語マーカーであるため、主体・客体関係は分明である。

② 内容類型学の主体・客体関係の基準は恣意的なものではない。それは、起源言語学(比較言語学)が、印欧諸語、フィン・ウゴル諸語、セム諸語等同系諸言語のある種の構造的類似性を発見し、さらにその類似性の中に現れる組織の体系性の発見に至ったのと同じアルゴリズム(algorithm)を通して得られた基準であり、また地域言語学がバルカン諸語の構造的類似性の発見から始まったのと同じである。内容類型学においても、身近に見る主格言語とは著しく異なる、バスク語やエスキモー語、カフカースの諸言語等の一定の構造的類似性の発見に始まり、これ等の類型種の構造的類似性の背後に、主体・客体関係の表現法における同一性(能格性)の認定がある。それは近年における活格構造の発見に至るアルゴリズムも同様である。そしてこれ等の各々の類似性、体系性を対比することによって、この主体・客体関係は主格言語の構造的輪郭にこそ最も合致することが判明するが、この関係は能格言語や活格言語においてもそれなりに表現されることが判明するに至る。すなわち、能格言語では能格(agentive)と絶対格(factitive)原理という意味的決定因子が主体・客体原理という意味的決定因子と未分化に融合しているが、活格言語では行為の主体、状態の主体、不随意行為・状態の主体という主体の細分化が機能している、というように(活性・不活性原理→2章)。したがって、諸類型は主体・客体原理という意味的決定因子への接近度の違いとして表すことができ、活格、能格の非主格言語それ自身も主体・客体原理への逐次連続的な生成過程として表すことができる。こうして、主体・客体関係の表現の差異、したがってこの関係を基準として類型を観ることの的確さは、演繹ではなく帰納的結論である。

③ 内容的言語類型においては語彙、統語、形態面の諸特徴が階層をなしつつ連係呼応して一体化しているという総体系的な性質を持つとすれば、音韻面の特徴もまたその階層性の中で相呼応すると推定されるが、この問題の解決の動きも芽生えてきている、として、いくつかの例が挙げられている。例えば、アプハズ・アディゲ諸語において、1人称単、複数及び2人称複数の能格指標が他動詞語基の先頭子音に隣接すると同化が起るが(アプハズ語 и-с-гойт > и-э-гойт「それを・私・運ぶ」、自動詞語基では同じ環境でも同化が起きないという。また、能格性のメカニズムを母音交替が担う例、アディゲ語能格動詞 дын「縫う」～絶対動詞 дэн「縫い物をする」。その他バスク語例や活格言語の同様の例について言及されている。

次いで、格単位の組み合わせも類型毎にそれぞれの意味的・構造的論理に従った固有の呼応目録を有することが示される。したがって、主格、対格、属格、与格、具格のような各単位の組み合わせは主格類型にのみ認められる格単位である。例えば、属格は主

格と対格の一緒の転置(transposition)であり、主格と対格という「位置格」(позиционные падежи [positional cases])からの派生である⁹。同様にして、与格も具格も二つの位置格からの派生である。主格言語と非主格言語では位置格が異なっていることは明白である(能格言語では能格・絶対格が位置格、活格言語では活格・不活格が位置格)。例えば、能格言語では具格機能は能格に融合しており、間接客体機能は能格機能の中に含まれており、また活格言語にも属格、与格、具格は不在(p.50)である。クリモフは、属格に限定機能があるだけでは属格を認定できないように、与格の副詞的(方向的、場所的)機能だけで与格の形成を認定できない、与格の認定は副詞的与格 *dativus adverbialis* と並行して客体の与格 *dativus objectivus* や主体の与格 *dativus subjectivus* が機能する場合だけである、と述べている(p.47)。属格の事情はどうか。それは活格言語において欠如している。圧倒的多数の能格言語でも属格は欠如しており、主格化傾向を示すごく一部の能格言語にだけ、一定の制約付きで属格の形成をみることができる。例えばナフ・ダゲスタン諸語では、客体の属格の機能はなく、主体の属格の機能が無生名詞では形成されない(有生性の意味を内包し得る少数の無生名詞にのみ可)という制約を持ちつつ現れるという。アヴァール語「石(絶対格)・落ちること」等々。また有生名詞でも、意味的力点が行為主体ではなく行為にある時には、主体の属格が絶対格によって置換される例も示している。ベジタ語「父(属格)・来ること」に対する「父(絶対格)・来ること」等々(p.46)。能格言語では概して、属格は能格(斜格)の機能が代替するのである。なお、活格、能格、主格言語間の格単位の相関関係については、2章で詳説される。

④ ある類型種と認定された代表言語には、純正さにおいて完璧な言語類型とは違って、当然様々な程度に別の類型の特徴が混在している。この場合、主導的支配的な特徴要素は何か、従たる要素つまり下位的周辺の要素は何か、という点こそ重要である。ところが、これ等両者の比重にはお構い無しにやたらと分離能格性(split ergativity)という概念が横行している。そのため分離能格性自体がまるで能格言語類型の専門特徴要素であるかの如き錯覚、悪循環が起っている。しかし、例えば、カルトヴェリ諸語やインド・イラン語の特徴を認定する時に、この概念に頼ることは不適當である。カルトヴェリ諸語では主格的要素が支配的要素であり、従たる要素は能格的要素ではなくむしろ活格的要素である(語彙と統語における主格性の特徴は勿論、形態特徴にも他動詞や態 voice

⁹ 「位置格」という用語は、カツネリソン「言語類型学と言語的思考」(1972), p.46 によるが、クリモフは本書で、また「活格言語の類型学」(拙訳「新しい言語類型学」)でこれを用いている。カツネリソン同著によれば、これは文における基軸格(основные, первичные падежи)のことである。

のような主格性の特徴が現れており、このことはアメリカのカルトヴェリ学者アロンソンも確認している)。またインド・イラン語の場合も主導的要素は主格性であり(他動性と態、「能格が有機的に持つ間接客体的な機能を失ってしまっている」)、「能格構造規範の外面的遵守らしきものは構造の限られた断片においてだけであり」(p.52)、その類型状態はむしろ分離主格性 split nominativity だとしている。

⑤ 言語と思考の問題である。同一の類型種に属する諸言語間の構造的類似関係に必然性がある、とする考えは過去のソヴィエト言語学に広く知られた主張であるとして、ヤーコブレフやメシチャニーノフの発言が取上げられる。極東の諸言語とヨーロッパの諸言語の構造的類似性・合一性の本質は、民族移動や相互的影響や文化的つながりのような外面的な条件にあるのではなく、「自己と客観的現実の関係の同じ様な捉え方、自己と遂行中の行為の関係の同じ様な理解の結果である」(メシチャニーノフ)(p.53)。これはつまり、構造的類似性の究極的な刺激因子は言語の担い手達の思考規範が主体・客体的な表象の点で原理的に同一性を持つ、という主張である。その後 40 年代の半ばにソヴィエト言語学では、「主格的」思考と「能格的」思考の違いを示すことができないことが判明し、こうした類似性は「言語的思考」(речевое мышление) の分野の一定の類似性に限る、ということで決着したが、このような類似性・合一性には法則性があるという考えそのものは、その後も類型学者達の念頭を去ることはなく、現代の諸研究にも、こうした類似性には必然性があり、偶然のいたずらではない、という印象が形成されつつあるとしている。この類似性・合一性が体系性、同質性、歴史的法則性をもつことから、これの究極的刺激因子が「言語的思考」の分野にあり、思考面に類型的な刺激動因を求めることは言語科学にとって伝統的にも正当だ、とする見解が当面のクリモフ等の結論と思われる¹⁰。そこで、ポテブニャの「言語の統語構造の段階的進化 эволюция は思考自体の発展における一定の時代を反映したもの」という発言を取上げ、またコルシの見解「精神の同じ様な要求が同じ様な現象を引き起こす。思考、意志、感情は、全ての言語において同等に自己のための表現を求めるのであり、相応の文種を作り出すのである」やクルトネの「類型学は、生理・心理的な基層に関わるもの」を紹介している (p.55)。

⑥ 言語の分類記述は人為的分類ではなく自然分類でなくてはならない。印欧語資料を基にして起源的語族分類の手法以外に世界の言語記述はあり得ないとしたバンヴニストの発言は修正する必要がある、内容類型学における原理的な自然分類の可能性に鑑みれば、

¹⁰ 「ソ連邦における類型学研究 (20・40 年代)」(註 1 「科研報告書」中の同書の翻訳第 4 章、特に p.301・304) 参照。

多構造諸言語の統一的記述組織モデルは起源言語学に匹敵するものであり、言語構造記述の自立的な手段としての内容類型学の役割は出色である。

内容類型学の基本問題は言語類型の基準 (основания) の問題だといっても過言ではないが、過去においては伝統的にユーレンベクはじめ 30・40 年代のソヴィエトの類型学者、多数の新フンボルト学派の人々、60 年代以前の研究者は、現実の主体・客体的弁証法の表現法に照準を当てながら一定の意味的基準の存在を裏付けるべく問題解決に当たることを前提として来たが、現在ではこの問題解決に当って二大潮流、二大傾向が見られる。第一の潮流は伝統的な路線と思想的接触を失っていない、主としてソヴィエトと大多数の西欧の類型学者と一部のアメリカの類型学者で、言語類型の「意味的性格に関するテーゼを基礎」とするグループ (グフマン、カツネリソン、キブリク、ヂャーコノフ、ヴェルネル、パルマイティス、ヴァチエスラフ・イヴァノフ、サフチェンコ、エーデルマン、ペハート、バーダー、ビルンバウム、セキ、カール・シュミット、フェーンリヒ等)。第一の潮流の特徴は、言語類型構造の体系性と階層性、語彙の一次性と文法の二次性、統語の形態に対する優位性、類型の基底における一定の意味的因子の存在とそれによって機能化される多レベル呼応特徴総体、等の認定が共通であることである。第二の潮流は、多数のアメリカやいくらかの西欧の論者 (アンダーソン、ワグナー、コムリー等、クリヤーヴィチはその先達の一人) で、「言語類型の意味基準を見ないで、世界の諸言語の構造的差異を、原則として純表層的なすなわち個々のレベルの専ら言語手法に関わる差異と解釈し……何がしかの全一的な言語類型を示しもせずある種の構造原理の様々な現れ方を示すのであって、言語における類型的变化は非常に多様な諸要因によって説明可能と考える」グループである (p.57)。

全体として上記の研究者を含めて、東欧 (デジェ、ロムボルト等)、西独 (K. シュミット、バーダー、プランク等)、フランス (レガメ、マルティネ、ラフォン、チャーホヴァ、ラザール等)、英国 (ハリデー、ライアンズ、テイラー、アンダーソン、キャットフォード、コリンジ、ワグナー等) の各研究者の諸研究を逐一網羅しながら、かなり綿密に批判的検討を加えている。アメリカの潮流の特徴として、「ヨーロッパで行われている内容類型学的な研究からひどく隔絶された状態で活動しており、先行の伝統との接点がまるで感ぜられない。全体として、経験面の一般化と純理論問題の提起に限っている。このため、彼等の研究には、言語類型と類型種の本質とか言語のあれこれの構造的諸現象の類型的関与性とか検討中の値の機能特性とか類型的再構の原理等多数の問題に関して何らかの判断を見出すことは難しい。大多数の場合、その研究対象は主格言語と能格

言語の構造特徴の相関性の検討に尽きるのである」(p.64-65)。ここではクリモフの評価あるいは批判的発言を全て網羅することはできないが、そのうちの若干の例だけを以下に記しておく。

例えば西独の類型学者について、「全体として、類型を全一的な多レベル構造組織と理解しており、語彙的包含事象に対する関心、異構造諸要素の機能分析への関心、またそのことから言語類型の意味的被制約性の探求に関する関心を示し……諸言語の実際資料を使いこなし、専門文献についての優れた知識を持っている」、と評価 (p.60)。また有名なカフカース学者である K. シュミットについて、「その立場はソヴィエトの類型学者に近い。……最も重要な積極的成果の一つは、印欧語やカルトヴェリ語の活格構造から主格構造への類型的進化における類似的並行関係全体を解明していることである。同時に、本書の筆者の類型学説の立場を幾分不正確に記述している限りにおいて、この学説の本質を理解し切れておらず、本書の筆者がかつて述べたことのない一連のテーゼは彼の責に帰すべきものである」(p.60)。

フランスの研究者について、「全体として、言語類型の意味的基準を認める方向に近づいている」(p.61)。「原則として、フランスの論者達は、非主格言語の資料を直接的に持っていることに注目しておくべきだ。……同時に彼等の研究の特徴は、内容類型学研究の共時的断面へ注意を傾けていることである」(p.62)。

英国の研究者については、「内容類型学の問題に関わる研究に内的な思想的統一性はない。主格組織と能格組織の相関性の問題に対する彼等のアプローチは、本質的に異なっている（この問題を英語の実際資料に基いて検討しようとする点での共通性は認められるが）」(p.63)。英国の研究者の中では、キャットフォード（カフカース学者）を「全体としてソヴィエトの類型学者の立場と同じである」としている (p.64)。

アメリカにおける研究について、「原則として、言語の文法的特性の意味的刺激動因を全く見ず、これは恐らくアメリカの言語学思想の伝統となっている、文法の脱意味的な理解に関連がある。……分離能格組織の概念を、普通彼等は、言語の能格的形態と主格的統語法から形成されるものと見る。……言語類型の語彙的包含事象を見ない。……全体として、内容類型学の分野のアメリカの研究は、この分野の研究の中では最も形式主義的な潮流である」(p.65-66)。例えばわが国でも著名なコムリーの研究について、「結局のところ、言語における能格性が広く発現する可能性について述べるが、能格性を主格組織と同レベルの類型組織と見なし得るか、という問題には答えていない。コムリーの研究実践についていえば、そこには類型論における部分系的なアプローチが目立ち、

また多数の具体的諸問題の形式的解釈の傾向が感じられる（例えば、主格性と能格性の相関性に対する彼の解釈、いわゆる anti-ergative 構造の仮定他を参照）（p.67）。勿論、アメリカの研究者の考えも多様であるとして、ヴァリン、アロンソン他の研究に言及している。ラテン・アメリカ（ブラジル）の研究者の中で注意を引くものとしてセキの活格言語（カマユラ語）研究に触れている。

上にいう二大潮流とは特に区分して、オーストラリアの言語学者の研究を取り出しており、彼等がオーストラリア、ニューギニア、オセアニアの非主格言語の資料を身近に持つことを活用してその諸研究が興味深いこと、能格類型の構造特徴の機能分析、例えば彼の言語学会の一つでの、能格、具格、所格の相関性についての専門的検討、能格構文受動性説に対する「冷静な態度」、動詞語彙の構造化原理が主格と能格化分化に法則的に作用するとする主張、に注目、評価している。同時に、オーストラリアの言語学者がヨーロッパ語で発表されている現代の専門書についての知識が不十分である、という「主体的状況」を指摘している。その上で、ブレイク（能格言語の他動詞の態 voice の上での未分化性、能格組織の諸要素の階層的相関性、また能格組織と主格組織の通時的相関性への関心等）、シルヴァーシュティーン（オーストラリア諸語資料を基にした、指示代名詞から普通名詞に至る、周知の代名詞・名詞句階層の提起）¹¹、ディクソンの研究が取上げられる。全体として、クリモフのディクソン評価は肯定的である。「アメリカの論者以上に明確に言語類型の体系性理解への傾向が感じられる」（p.71）、「形式主義的なアプローチに譲歩する傾きのある国外の類型学者等と違って、統語レベルと形態レベルでの言語類型の実現に一定の組織体系的な依存関係性を認めている」（p.72）。ただし、彼については、歴史的に能格的なオーストラリア諸語の主格化過程という彼の結論は「確かに関心と呼ぶ」と結んでいる（これについては、第2章で批判される→本稿 p.85-86）。

以上とは別に、グリーンバーグの語順類型論への批判が置かれる。類型の恣意的基準批判についてはすでに上に記述しているが、「文の優位成分の語順」の類型学の創始者としてのグリーンバーグについて、あらためて、度々「含意的普遍 implicational universal」として定式化される基本的な構造的依存関係が質的分析によるのではなく、通常、統計的基盤に基いて導き出されたものであるが故に、これはひどく大量の例外を伴うことが観察される……彼が提起する 41 の普遍は活格構造の組織全体に矛盾するものであり、活格構造の代表言語は SOV の語順特徴を持ちながら、格パラダイムを持たないのであ

¹¹ 身近には、角田大作「世界の言語と日本語」（くろしお出版）第4章、等を参照。

る」(p.73)、と批判している。

最後に、主語・述語関係とテーマ・レーマの区分に基く構造研究の間には「目立った一致は何ら期待できない」こと、この分野のリーやトンプソンの研究テーゼに拠るならば、主格諸言語が全く別の類型に区分されてしまう、と指摘するだけで、見るべき評価はない。

第2章 内容類型学的言語分類の問題

世界の諸言語の分類が類型学の要の問題であることは間違いない。「類型分類の目的は、世界の諸言語の構造に関する情報の最も効率的なコード化手法を作り出すことであり……このようにして多様な言語の同型性が現れて来るのであり、……未知の諸言語の研究に役立つことを予定するもの」(ウスペンスキー)である。言語学においてこの分類はシュレーゲル、フンボルト、シュライヒャー、シュタインタール等による、いわゆる形態分類から始まった。ところが、この形態的類型分類に不満を抱く人達は多く、20世紀の中頃から非分類類型学を主張する研究者(メンツェラト、グリーンバーク等)も現れて来る。しかし、起源言語学や地域言語学を世界の言語の系統的分類や地域的分類に帰することができないのと同様に、言語類型学の内容も言語分類に帰することはできないが、「資料の分類段階にも達し切っていない類型学研究に価値があるとは認め難い。つまるところ、類型学における分類の重要性の軽視は……類型学にとっての言語類型概念の役割の軽視につながる」(p.78)。こうした類型学における理論面の苦闘と試行錯誤(ソシュール、サピア等)の一方で、風変わりな(exotic)言語たる能格言語の発見等経験实际的知識が蓄積されて行く中で、自らの言語の主格性、主格言語たる自覚も得られ、そこに形式類型学と内容類型学の分化が始まったと思われる。クリモフは、形式類型学と内容類型学が目的を異にし、多くの点で直接的比較は困難であるけれども、内容類型学的分類は人為的分類ではなくて自然分類であるため、「恐らくはるかに内容類型学の方が広範な説明力を有し」、またその分類の「自然的であるという属性」からして内容類型学の方が諸類型間の通時的関係を見通す力に優れている、と主張している。クリモフがここにいう説明力とは、諸類型の歴史的連続性、弁証法的因果関係の説明と共に、任意の構造特徴を組織体系全体＝全一(的構造)体に連係する環として説明する上で、すなわちクリモフのいう「包含事象 implication」の一としての説明において、効力があるという意味である(cf. 恣意的基準から導かれるいわゆる「含意的普遍 implicational universal」の説明力)。要するに、歴史性と体系性における説明力である。

以上の前置きに続いて、「言語の多レベル呼応特徴の集合体の、主体・客体関係への定立度に従って」現時点で内容類型学が確定しかつ構造的に特徴付ける可能性を持つのは少なくとも四類型(類別型、活格型、能格型、主格型)であるとする。以前提示していた類別型の前段階としての中立型類型を仮説(西アフリカのマンデ語族の諸言語について仮説)することについては、名詞語彙とか動詞語彙のような内容類型学研究にとって基本的な問題が未解決であるという理由で、当面保留している¹²。ただし、ここでは、歴史的に立証されていない言語類型の存在の可能性について否定している訳ではなく、これを発見確定することもまた内容類型学の今後の重要な任務の一つであるというクリモフの意図が窺われる。その上で先ず、これ等四類型の立証される言語地理、言語名について記述する。例えば、類別型とりわけ後期類別型言語としてバントゥー諸語、活格型たる北米(サピアのナ・デネ「大」語族等)や南米(例えばトゥピ・ワラニー語族等)の諸言語他、能格型としてバスク語、アプハズ・アディゲ諸語、ナフ・ダゲスタン諸語他多数、主格型として印欧諸語、アフロ・アジア諸語、日本語、朝鮮語、中国語他多数が挙げられる。

		類別型	活格型	能格型	主格型
語彙	名詞	多数事物類	活性類~不活性類	∅	∅
	動詞	(?)	活格動詞~状態動詞	能格動詞~絶対動詞	他動詞~自動詞
統語	構文	?	活格構文~不活格構文	能格構文~絶対構文	主格構文
	補語	?	近い補語~遠い補語	「直接」補語~「間接」補語	直接補語~間接補語
形態	名詞	∅	活格~不活格	能格~絶対格	主格~対格
	曲用				
	動詞	多類別・人称接辞	活格系列~不活格系列	能格系列~絶対格系列	主体系列~[客体]系列
	活用		人称接辞	人称接辞	人称接辞

上の表に関連して (p.87)¹³、以上四類型の診断基準となるコード特性 (coding

¹² cf. クリモフ「新しい言語類型学—活格構造源とは何か」(三省堂) p.243-244

¹³ 「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」(三省堂 p.243) に掲げられる表と基本的には同じであるが、ここでは、中立型が削除されている点、能格型言語に機能する動詞名—「他動詞~自動詞」—からの修正、また能格型における補語には「直接」「間接」補語のように「 」が付けられ、条件的規定であることを強調している点に注意(前書では「 」はない)。なお、表中の「能格動詞~絶対動詞」という名称は、本稿筆者による書き換えであり、クリモフ自身のものではない。クリモフの表では「行為主動詞 агентивный [agentive] ~事実主動詞 фактивный [factive]」と書かれ

properties) とコントロール特性 (control properties) の説明がある。コード特性として、語彙レベルでは名詞語彙と動詞語彙の一般的原理(名詞と動詞の分類法、品詞目録)と個別的原理(語類の様々な特徴)、統語レベルでは構文の特色、二次成分の構成)、形態レベルでは動詞活用中の人称接辞機能、名詞曲用の位置格の有無、機能、さらには形態音素レベルの諸事実があるが、これ等コード諸特徴の構成はどの類型においても同じであって、これが各類型の意味的刺激動因—意味的決定因子 semantic determinant—to コントロール(制御)されるという点が異なっており、正にこのコード特性から各類型の意味的決定因子の性格を診断することができる。また、コード特性は内的階層性を持っており、類型的構造体の支配要素が語彙の構造化原理、なかんずく動詞の語彙化原理であることも指摘される。関係文法がいうコントロール特性についていえば、これは同一名詞句削除 (equi NP deletion)、主語繰上げ (subject-raising)、再帰代名詞化 (reflexivization)、等の統語テストを診断基準とするものだが、このテストの完成状態は未だ不十分で限界があり、「類型学的結論にとって非関与的であることは、専門書に再三指摘されており」(p.86)、「その可能性の評価は言語学者によって異なる」(p.213)、というのがクリモフの評価である。

類別型について、これの析出について第一歩を踏み出したスカリチカやメンチャニーノフ「動詞」の研究以来当該類型の研究に付け加えられたものは少ない¹⁴。名詞の分野では、内容的に規定される一定多数群(人間類、樹木類、果物類等々)の類別が行われ、類別接頭辞を付加して名詞の類(クラス)別が指示されるが、形態が語形成から分化していない。名詞の類別組織の文法範疇は明らかであるが、動詞の構造化手法については未解明である。クリモフは、普通行われている他動詞と自動詞という記述は、動詞語彙素の概念とその具体的な語形の概念を区別していないからだ、としている。動詞構造内にも名詞類別に一致呼応した類別指標が置かれるが、この動詞類別指標は人称指標機能と融合しているため、純粋な人称指標ではない。

例えばクリモフが挙げる 1 類~18 類のスワヒリ語動詞の多類別・人称接辞の下の表では、3 類以下では一類一系列接辞が示されるが、1 類 (人間類単数)、2 類 (同複数) の接辞系列では機能的に類別接辞と人称別 (1, 2, 3 人称の 3 種) 接辞が融合している (p.91)¹⁵。

ている。

¹⁴ И.И.Мещанинов, Глагол, Изд. АН СССР, 1949, стр.148, 149 (Наука, 1982, стр.171, 172)

¹⁵ 例 Ni·li·sema (1 類 1 人称接頭辞・過去指標・言う)「私が言った」; U·li·sema (U=1 類 2 人称接頭辞)「あなたが言った」; A·li·sema (A=1 類 3 人称接頭辞)「彼(女)が言った」; Ki·li·anguka (7 類[事物類]接頭辞・過去指標・倒れる)「(7 類の)それが倒れた」; Ki·kombe (7 類名詞接頭辞・コップ)

1 類	1 人称 ni· 2 人称 u·(ku·) 3 人称 a·(m·)	2 類	1 人称 tu· 2 人称 m·(wa·) 3 人称 wa·	3 類	u—	4 類	i·	5 類	li·
6 類	ya·	7 類	ki·	8 類	vi·	9 類	i·	10 類	zi·
11 類	u·	15 類	ku·	16 類	pa·	17 類	ku·	18 類	mu·

クリモフは、スワヒリ語動詞の形態分野の特徴として、① 類別・人称指標系列が単一系列で、主体・客体的な関係の観点から見て未分化な (diffuse) 系列であり、この関係はこれ等未分化な系列の動詞語形中への組み込み・配列に任されていること(従って活格、能格、主格系列の接辞とは次元を異にすること)、②非態的なディアテシスが機能すること、従って普通能動態、受動態として記述される形態手段は不適切であること、の二点を挙げている。また名詞は曲用を欠き(「安定した類別群による名詞語彙素の区分に暗示・含意されるのであろうが」p.90)、従っていわゆる位置格を証することはできない：「格範疇の理解において、位置格が欠けている以上格パラダイムの存在は認めないという観点を持している」(p.91)。

次いで活格型。語彙レベルの特徴として、名詞の二類別(活性類と不活性類)がある：人間、動物、植物を表す活性[有生]類とその他残余の指示物を表す不活性[無生]類。動詞語彙も、この二類別に呼応して、活格動詞(行為、運動、その他生命的機能活動を行う動詞類)と状態動詞(性質、特質、状態を表す動詞類)がある。活格動詞例：「産む・生まれる」「育つ・育てる」「死ぬ」「食べる」「折る・こわす」「集める」「走る」「飛ぶ」「歌う」「吠える」「咬む・咬みつく」等々。状態動詞例：「横たわっている」「ぶら下がっている」「突き出ている」「咲いている」「響く」「病んでいる」「揺れる」「吹く」「むずがゆい」「長い」「暖かい」「緑だ」等々。多くの場合、活格動詞は有生動詞であり、状態動詞は無生動詞

ki·li·anguka (7 類動詞接頭辞-過去指標-倒れる)「コップが倒れた」。また名詞類別接頭辞と動詞類別接頭辞は相呼応して一致するのが原則だが、次第にこの多類別呼応関係は崩壊の兆しを見せ、二類別の有生～無生類別に統合される傾向が窺われるという。例えば、7 類には人間を表す若干の語もあり、「若者」は 7 類であるが、Ki·jana (7 類接頭辞-若者) a·li·soma (1 類 3 人称接頭辞-過去指標-読む)「若者が読んだ」のように呼応するという(Ki·jana ki·li·soma でなく)。そのため、クリモフは、スワヒリ語を初期活格言語(名詞の有生・無生別を持つ)に近接する後期類別型言語としている。なお、表中 1、2 類接頭辞に見られる () 内の ku·, mu·, wa· 指標は客体接頭辞(ただし任意；クリモフは、これが任意であることは、「パントゥー諸語が厳密に一貫した類別型代表言語に属し得ないこと」を示している、としている)。また、スワヒリ語の場合、「人称範疇内で下位的な類別分類が認められる他の類別構造の幾つかの代表言語とは異なって、ここでは人称範疇がより全体的な類別範疇下に従属している」、と注記している。

であり、したがって活格動詞は活性類名詞主語を、状態動詞は不活性類名詞主語を予定するが、この呼応関係は歴史的には変動して行くため、一貫した呼応関係は期待できない。また、上例動詞語彙素にすでに現れているように、他動性～自動性は活格言語に関与的な特徴でないから、「死ぬ・殺す」「燃える・燃やす」「乾く・乾かす」等々のタイプの動詞が単一の語彙素として機能している。

統語面では、構文特徴として、活格動詞が指定する活格構文と状態動詞が指定する不活格構文の別がある。活格言語類型の類型種には、不随意行為・状態動詞語彙素が指定する情緒構文が存在する場合もある¹⁶。文の二次成分の特徴としては、活格動詞にのみ付随して現れる近い補語と状態動詞下でも現れる遠い補語との対立が見られるが、これは活格動詞と近い補語との統語的一体性、状態動詞の主語との統語的一体性を表しており、そのことがしばしば抱合 (incorporation) として現象化する¹⁷。

形態レベルでは、動詞語に組み込まれる二系列(活格系列と不活格系列)の人称接辞の対立がある。活格系列接辞は活格動詞の主体、不活格系列接辞は状態動詞の主体と活格動詞に付随する場合の客体を指示する。多類別と人称別を未分化に融合した類別型言語の多類別・人称接辞から二類別・人称接辞への変換という性格が窺われる。次は、クリモフが挙げるワラニー語 (南米) の二系列人称接辞の例 (p.93) :

人 称	単数		複数	
	活格系列	不活格系列	活格系列	不活格系列
1	a·	še·	ja·, ro·	jane·, oro·
2	re·	ne·	pe·	pene·
3	o·	i·, ø·	o·	i·, ø·

また、名詞形態として二つの基軸格＝位置格たる活格と不活格が見られることもあるが、機能的には同一の二系列の類別・人称接辞の対立の弱化的代償措置として発達してきた可能性がある。

¹⁶ 活性原理・不活性原理が有生・無生原理に近い初期活格言語では、情緒構文が存在しない可能性も排除できず、例えばナ・デネ諸語では同構文を指定する不随意行為・状態動詞類が活格動詞類から分化していないと思われる (cf. 「新しい言語類型学」(三省堂 1999) p.51-52 他)。

¹⁷ 近い補語とは主格言語の直接補語に比べてはるかに外延の広い概念で、活性行為の向けられる対象 (他動的行為の客体) に加えて、運動が向けられる方向も含む。遠い補語は、機能的には状況語 (行為や状態の時間、場所、行為手段等を含む) に近いもの。活格構文は近い補語も遠い補語も含むが、不活格構文に存在するのは遠い補語だけである (cf. 「新しい言語類型学」 p.97-98 他)。

さらに注目すべき動詞形態の特徴として、活格動詞に遠心相 (centrifugal version, extrovert contrast) と非遠心相 (noncentrifugal v., introvert c.)=求心相という、態 (voice) 的でない独特のディアテシス(相)の別が挙げられる。前者は行為が活性行為項の範囲を超えて広がり行くことを、後者はそれが行為項内に閉じこもることを表す (例えば、「殺す」～「死ぬ」;「燃やす」～「燃える」;「目覚めさせる」～「目覚める」;「連れ行く」～「行く」;「乾かす」～「乾く」等々の対立; cf 印欧語の能動相～中動相の対立)¹⁸。他動性～自動性のような主体・客体的関係性の観点からすれば未分化拡散的な意味価を担う単一の動詞語彙素「殺す～死ぬ」「燃やす～燃える」等が機能する活格言語であつてみれば、これは動詞形の意味の具体化にとって重要な手段である。動詞形態の第二の特徴は、時制範疇に比して動作態 (Aktionsart) の発達が著しいことである。名詞形態では、活性類名詞に有機的 (非分離) 所有 (organic [inalienable] possession) と非有機的 (分離) 所有 (inorganic [alienable] p.) の別があり、また有機的所有の接辞が不活格系列の動詞人称接辞と同一である点が注目される¹⁹。クリモフは、以下のようなカムユラ語 (トゥピ・ワラニー語族) の文例をもって活格言語を例証している (p.94): 1) wararawijawa (犬) moja (蛇) o-u?u (咬んだ), 2) wəra (鳥) o-wewe (飛ぶ), 3) ita (石) i-po-wəj (重い), 4) i-?ajura (彼[の]・首) i-haku (長い)。活格動詞「咬んだ」「飛ぶ」には活格系列接辞(o-)が組み込まれ、不活格動詞「重い」「長い」には不活格系列接辞(i-)が組み込まれている。また、4) 文の「首」には有機的所有接辞=不活格系列接辞(i-)が付加されている (cf. 上記ワラニー語接辞表)。

能格型。まず語彙面に関しては、類型型や活格型のような名詞類別はない(残滓的に化石化した類別を残す能格言語ナフ・ダゲスタン諸語等は存在する)。一方、動詞は行為主動詞(agentive verb)と事実主動詞(factitive v.)の二群に区分される(以下、本稿ではこれ等を能格動詞と絶対動詞と呼ぶが、内実はクリモフのいう agentive-factitive の別を指す)²⁰。行為主動詞=能格動詞は、行為が主体から客体へ広がり及んで客体を改造・変貌させてしまう行為を表す:「折る・砕く」「切る」「殺す」「伐採する」「乾かす」「捕える」「耕す」「掘る」「播種する」「焚く」等。事実主動詞=絶対動詞は、主体の状態ないしは主体の客体に対する影響が表面的であることを表す動詞:「育つ」「歩行する」「横た

¹⁸ 「新しい言語類型学」(三省堂 1999) p.108, 115-118 他。全体として、活格型言語の詳細については同書を参照。

¹⁹ 前掲同書 p.108, 123-124 他参照。

²⁰ агентивный (agentive) – фактитивный (factitive) という用語そのものが、キブリク (ロシア) の提起によるものであることは、「新しい言語類型学」(1999, p.46, 137) にも記されている。ただし、同書でも、能格言語の動詞について、他動詞～自動詞の用語が踏襲された。

わっている」「走る」「叫ぶ」「歌う」「踊る」「押す・突く」「打つ・叩く」「つねる」「ひっかく」「かみつく」「接吻する」「引っ張る」「待つ」「頼む」「罵る」「呼ぶ」等 (p.95)²¹。

以上から、主格言語では概ね意味的他動詞～自動詞は構造的他動詞～自動詞であるが、主格言語の意味的他動詞～自動詞は、能格言語で能格動詞～絶対動詞のように対応するのではなく、そこでは次のように対応することになる。すなわち、我々のいう意味的他動詞は、能格言語における ① 構造的他動詞すなわち能格動詞 *agentive v.* (能格構文を指定する)、② 可変動詞 (*labile v.*) = 拡散動詞 (*diffuse v.*) = 他動・自動詞 (*transitive-intransitive v.*)、情緒動詞 (*affective v.*) = 不随意行為・状態動詞 (*v. of involuntary actions and states*)、所有動詞 (これら ② は他動詞・自動性に関して中立的で、能格構文も絶対構文も指定する)²²、③ 構造的自動詞すなわち絶対動詞 = 事実主動詞 *factitive v.* (絶対構文を指定する)、の中に配分されていることになる。一方、構造的自動詞すなわち絶対動詞 (*factitive v.*) の中に含まれている意味的自動詞がまるで構造的他動詞すなわち能格動詞 (*agentive v.*) のように振舞う、すなわち能格主語を持つことがある。例えば、「走る」「飛ぶ」等は絶対動詞であるにも拘らず能格主語を持つことになるが、この種の動詞は能格構文ではなく能格式構文 (*эргативообразная конструкция*) を指定する、とされる。勿論、この構文の内実は絶対動詞が指定する絶対構文であるが、形態上能格を残滓する絶対構文の変種のことであり、恐らく活格動詞に呼応した活格主語の残滓的現象であると思われる²³。クリモフは、絶対動詞に絶対格

²¹ 尤も、能格動詞と絶対動詞の語彙構成は、能格類型種に属する言語の、能格類型基準からのズレの程度 (つまり主格化傾向への接近程度) に応じて多様かつ変動することに留意しておかなければならない、と思われる。例えば、クリモフが挙げる能格構文と絶対構文の「一般的な例証」(バスク語例)には、「見る」を能格動詞 (*agent.v*) とする例もある (p.105): 能格構文 *ni·k* (私 *erg*) *gizona* (人 *abs*) *da·kusa·t* (3sg/*abs*—見る[語根]—1sg/*erg*) = 「私が・人を・見る」; 絶対構文 *ni·o* (私 *abs*) *na·bil* (1sg/*abs*—行く) = 「私が・行く」。バスク語は主格化の傾向を示す能格類型種である。

²² 可変動詞とは、意味的に未分化拡散的であるため拡散動詞とも呼ばれるが、例えば同一語彙素としての「燃やす・燃える」「殺す・死ぬ」「壊す・壊れる」等が文環境によって可変的に振舞うものをいう。こうした動詞語彙素は、活格動詞の残滓と思われる。例 アディゲ語「国家が・工場を・売る」と「国家が・商取引する」の単一語彙素「売る・商取引する」は可変動詞。可変動詞に関しては次を参照。Г.А. Климов, Очерк общей теории эргативности, p.118-124 他; 山口巖「類型学序説」p.71, 77, 96 他。

²³ クリモフ「能格性総論概説」によれば、「能格式構文」という概念はエリザレンコヴァ (Т. Я. Елизаренкова) の用語であり、また同様の意でアブドゥラエフ (З.Г. Абулдуллаев) も「能格系構文」(*эргативоидная к.*) を使う。同用語について、形態のレベルに結び付けて能格性特徴を云々しても、それは必ずしも統語特徴を規定することにはならないが、「構文のモデル化に一定の困難が伴うような一連多数の構文の特徴づけには便利な用語である。能格機能の斜格主語を持つ構文あるいは客体『呼応』しない動詞述語を持つ構文のことである。……形態的な形式化の面で外面上能格構文に近いが、厳密には非能格構文である」。自動詞述語に能格主語を持ち、従って直接補語を前提としない、いくつかの二項文」(例「明らかに活格構文モデルの残滓であるグルジア語の構文

主語と能格補語(間接補語)を措くカバルダ語の例(すなわち③の例)として、「彼が(abs)・彼に(erg)・咬みつく(fact.v)」 「彼が(abs)・彼を(erg)・呼ぶ(fact.v)」、cf. ツアフル語「父が(abs)・息子に(allative)・追いついた(fac.v)」を(p.97)、また絶対動詞に能格主語を措く能格式構文例として、レズギン語「彼が(erg)・跳んだ(fac.v)」(p.97)、「彼が(erg)・走った(fac.v)」(p.98)を挙げている。

さらに、主格言語と能格言語の語彙化原理の違いを示すために、「他動詞から形成される使役動詞の名詞支配の特徴」として、使役対象名詞が「原則として」、直接補語を取る主格言語とは異なって間接補語になることを指摘している：アディグ語「老人が(erg)・若者に(erg=間接補語)・牛を(abs)・連れてこさせる(使役動詞)」(p.98)等。

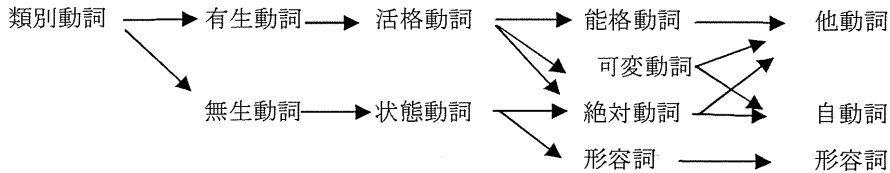
能格言語の動詞語彙化原理に関して、「筆者自身、過去においては伝統に压せられるままに他動詞と自動詞という用語を持してきたが……現在では……この考えの的確性について重大な疑念を引き起こす論証集合が相当多数に上っている。」(p.95)としている²⁴。他動詞～自動詞という用語を用いることは、結局能格構造の一面的な理解につながるようになる。同用語を巡る議論、研究史については、かなりの紙面を割いて様々な研究者(デュメジル、ラフォン、マルティネ等々)の言語記述や発言等を辿りながらその誤りを指摘しているが、ここでは省略する(p.98-102)。このことはまた、後述するように、能格言語を $S(\text{subject})=P(\text{atient})\neq A(\text{agent})$ ピヴォットとする、一般に普及している解釈の誤りにつながっていると思われる。能格言語「他動詞」に関する認識の修正という点では、他動性～自動性に関して、以前、これが能格言語では動詞語彙素自身に表示されるいわゆる「顕在範疇」であるのに対して、主格言語ではこれが動詞の語形を超えて現れる「非顕在」ないしは「潜在範疇」という理解をしていたが、「その後、他動性はひいき目に見てもせいぜい一定の形態範疇(人称範疇)の表示と融合しているのだから、能格言語の他動詞の形態構造に専用の他動詞性の表示があることを証する訳には行かないことが明らかになった」(p.101)と述べている²⁵。

deda:m 「母が・能格」 itira 「泣いた」；「馬[能格]が走った」「赤ん坊[能格]が這い回った」等々、あるいは主語に能格、補語に斜格の一つを持つ「いくつかの三項文」(グルジア語 mekere:m 「ゴールキーパー・能格 burt:s 「ボール・与格」 mouscro 「近づいた」等々)、と説明している(cf. Г.А. Климов, Очерк общей теории эргативности, Наука, 1973, стр.51-52)。

²⁴ 「内容類型学原理」(p.95)のこの引用文には、「ただし、両類(他動詞と自動詞)の内容が幾分特殊な性質を持つという感触は常に筆者の中にあった」、と注記している。「過去において」とは、例えば Г.А. Климов, Очерк общей теории эргативности, Наука, 1973 (クリモフ「能格性総論概説」)での定式化のこと。

²⁵ 「新しい言語類型学」三省堂 1999 (p.134, 241) では、能格言語における「他動性」と「自動性」を顕在範疇として、主格言語におけるそれを潜在範疇として記述している。また「能格性総論概説」

以上から、コード特性の中で特に重要な動詞語の各類型間の相関性(これは歴史的再編過程でもある)を図示すれば、概ね次のようになると思われる(なお、下図では可変動詞部分に情緒動詞、所有動詞も含める)：



統語面では、既述のように、能格動詞が指定する能格構文と絶対動詞が指定する絶対構文が存在する。文成分目録では、上記の動詞語彙化原理という条件下でのみ現れる「直接」補語と「間接」補語を挙げることができるが、これは主格言語における同名の補語ではない。なお、時に能格言語の文モデルとして挙げられるいわゆる「逆受身 anti-passive」構文に関しては、能格言語の随伴事象 (frequentalia) として(つまり前段階の包含事象の痕跡として)現れる非生産的な可変動詞類が形成する絶対構文を指して言われるものであり、「このようなアプローチは、能格性を特徴付ける本質をやたら増幅させるものであり、このことはすでに 40 年代のカフカース学者が熟知していたことである」(p.102)、と指摘している。

形態の分野では、動詞活用における能格系列と絶対格系列の二系列の人称接辞が機能する、あるいはまた同系列接辞が弱体化ないしは欠如する時にはその機能を代償して能格と絶対格という二つの位置格が発達、機能化する。能格系列接辞あるいは能格は能格動詞の主語および「間接」補語(とりわけ具格的補語)を、絶対格系列接辞あるいは絶対格は絶対動詞の下での主体および「直接」補語を形成する。活格言語、類別言語の動詞の接辞系列や活格言語の二つの位置格が文法的性格だけではなく類別的性格を兼備している点が、能格言語における動詞の接辞系列や位置格との最大の相違点であろう、と思われる。能格言語では、接辞系列や位置格が多少とも類別的性格を脱して文法化を強めているからである。

絶対格が主体機能と客体機能を融合していることはだいぶ以前から認知されていたが、能格における主体機能と間接客体的機能、具格的機能の融合性(兼務能格性)は、つい最近になって認知を受けたという：アディグ語「客-_M が[erg]・若者-_Mに[erg]・馬を-_p

(p.70) では、この語形成面における差異を示す例として、① 専用派生接辞によるケース、② 語源的に異なる語基によるケース、の二つのケースをアヴァール語やアディグ語を使って示している。

[abs]・渡した」; バツビ語「牧人・B が[erg]・足・B で[erg]・蛇・ø を[abs]・殺した」(p.103)²⁶。また、能格言語類型種の中に、能格が間接客体機能を失い主体機能だけを持ついわゆる非兼務能格の言語が存在し、これが能格から主格へ向かう再編過程の重要な一歩を意味することは、すでにメシチャニーノフが確認していたことである²⁷。また、形態面の特徴として、態(voice)的なディアテシスが欠如しているにも拘らず、バスク語等に受動構文を認定する議論の誤りを指摘している²⁸。

主格型。語彙面では、能格言語の場合と同じく、内容的に規定される類別は存在しない。主格言語の中に見られる性(gender)による分類は「主格性の包含事象でなく、通時的動機によるものである」(p.105)、すなわち性は主格言語ではすでにかつて存在した類別の化石的残滓であると思われる。一方、動詞は他動詞類と自動詞類に区分される。動詞語彙素に備わる主体と客体の意味価(intention)は、能格動詞と絶対動詞の対立と比べれば一層明白であり、他動性～自動性が主体と客体の意味機能に定立していることは明らかである。従って、「他動性は意味の観点からは定義不能であり統語レベルの問題」とするクリフォーヴィチの観点を否定している。

統語面の特徴としては、他動詞、自動詞の何れに対しても単一の主格構文を指定することである。他動詞述語は二種類の構文—能動構文と受動構文—の形成に与るが、これは決して主格構造の不可欠のものではなく、「恐らく通時的有契性 мотивация にのみ関係し得るもの」、としている (p.106)。また二次成分としては、他動詞と自動詞への区分に関連して直接補語と間接補語の存在が挙げられる。一般に主格言語の特徴とされる SVO 語順については、当面主格構造組織の他の呼応特徴との関連性が説明できないとしている。

形態面の特徴としては、「単一の(内容的に主体的な)人称接辞系列」が機能すること

²⁶ 能格の兼務性については、基準的能格型に近いアプハズ・アディグ諸語では以前から経験实际的に知られていたが、ナフ・ダゲスタン諸語の証例でも最近確認されたという(p.103); アディグ語は4格(絶対、能、具、状況格)体制。能格接辞(·m)は「属格、与格、所格等を融合する」(Языки мира, Кавказские языки, изд. Academia, 1999, стр.95); バツビ語(ナフ・ダゲスタン群)は主、属、能、与、具格他およそ22格体制。その内の一つ、能格第二接辞 -в = 具格接辞 (Языки рос. федерации и сосед. госуд. I, Наука, 1997, стр.167)。

²⁷ 兼務能格と非兼務能格(専用能格)については、「能格性総論概説」に詳しい; cf. И.И.Мещанинов, Новое учение о языке, ОГИЗ, 1936, стр.190-194; 能格が主体機能と客体機能(具格機能と間接客体機能)を原理的に兼務していることを初めて強調したのはメシチャニーノフである(クリモフ「ソ連邦における類型学研究(20-40年代)」(1981)一註1「科研報告書」p.277参照)。

²⁸ クリモフが挙げるバスク語文の誤認例(p.116) Pierres·k (能格) egin da (建てた) etchea·ø (絶対格)「ピエールが・建てた・家を」→「ピエールによって・建てられた・家が」。cf. egin da=factus est と解説される(下宮忠雄「バスク語入門」大修館書店 p.311)。

であるが、ただし主格言語の中には、動詞語に主体系列と客体系列の二系列の人称接辞を組み込む二重人称活用原理に従うものも存在する²⁹。また、曲用パラダイムにおいては、明確に主体と客体に定位した二つの位置格—主格と対格—が存在する。この位置格＝基軸格を基にして、主体と客体の転置 (transposition) である属格が属格の第一次(基本)機能として発生、それが「他の全ての名詞付き属格つまり部分属格や所有属格(二次的機能)の基礎であり、これ等は歴史的観点からすれば比較的遅い層を形成する(例えば、印欧諸語では、所有性は、主として形容詞が表したことは周知のところである³⁰)」(クリヤーヴィチ) (p.108)。属格の形成は主格構造化の特徴の一(包含事象)であり、能格言語では、主格化傾向を示す少数の言語にのみ属格が見られるが、その場合も、客体の属格を欠き、主体の属格だけが限定的に使用されると、クリモフは指摘している³¹。与格や具格も主格構造の格パラダイムに典型的に適合するものである。能格構造ではこれ等の格機能は能格の間接客体的機能に有機的に組み込まれており、主格言語から見れば未分化なのである(主格構造では直接客体と間接客体の意味機能が主体機能とは分離されているのに対して、能格構造では絶対格は直接客体機能と融合していて対格を必要とせず、能格は間接客体機能と融合して与格や具格を必要としない)。このこと(兼務能格から非兼務能格[専用能格]への再編過程)については、すでに 30 年代にメシチャニーノフが指摘していたことである:「外カフカスのヤペテ諸語において能格に定着しておるのは専ら行為主の意味つまり行為主の格であり、……能格が未だに具格と融合している北カフカスの諸言語と比べてはるかに前進を遂げている」(p.109)³²。

さらに、多数の主格構造言語には一般的に態 (voice) 範疇(能動態と受動態の対立)が認められ、この定義自体が主体・客体的二分法を反映している。同時に、相 (version) 範疇を知る主格言語があり、これもまた明確に主体あるいは客体の意味内容を有する。すなわちカルトヴェリ語の主体相、客体相、中立相³³あるいはまたサンスクリットの為自

²⁹ クリモフは具体例を挙げていないが、例えばグルジア語主体マーカ 1/sg(v-), 2/sg(ə-), 1/pl(v-...t), 2/pl(ə-...t), 3/sg(-s), 3/pl(-en) ; 直接客体マーカ 1/sg(m-), 2/sg(g-), 1/pl(gv-), 2/pl(g-...t), 3/sg,pl(ə) が組み込まれる: *v-g-kl-av > g-kl-av 「私が・君を・殺す」(v-g の連続では v が落ちる), ə-m-kl-av 「君が・私を・殺す」, m-kl-av-s 「彼が・私を・殺す」, g-kl-av-en 「彼等が・君を・殺す」等々。

³⁰ ロシア語史でもこのことは証明されている。ただし、スラヴ語全体としてみれば、今日でも生格よりも所有(物主)形容詞が優勢であるスラヴも存在する (cf. 拙著「ロシア語の歴史—歴史統語論」ブイツーソリューション 2007, p.245-247)。

³¹ 本稿 p.64 参照 (原書 p.46)。

³² И.И. Мещанинов, Новое учение о языке, ОГИЗ, 1936, стр.190

³³ グルジア語 mezobeli (隣人・主格) saxl-s (家・与格) a-šen-eb-s (建てる・3/sg) 「隣人が・家を・建てる」の文には「誰の(のために)」家を建てるかを明示していないから中立相。i-šen-eb-s

言 (ātmanepada) [middle 反射態]、為他言 (parasmaipada) [active 能動態]が想定されている。また、相が能格言語(例えばアプハズ・アディグ諸語)に現れる場合は、それが主体と客体の対立に明確に定位しておらず機能的に未分化である、としている。

以上の各類型の語彙、統語、形態レベルの構造的諸要素がそれぞれの類型内でそれぞれの意味的決定因子に定位していることは、明らかである。例えば、主格組織では、動詞人称接辞、他動詞と自動詞、主格構文、直接補語と間接補語、主格と対格、能動態と受動態等が、一様に主体と客体に定位して構造化される(主体・客体原理という意味的決定因子に則る)、一つの類型組織の呼応要素である。

ところが能格構造における意味的決定因子については、主格構造との類型的近似性のマクシムムによって長い間主格構造の用語でもって記述され、そのため未確定のままであり続けてきた。能格動詞 (agentive v.) と絶対動詞 (factitive v.)、「直接」補語と「間接」補語、能格構文と絶対構文、態の形態範疇の欠如、能格と絶対格を位置格とする独特の曲用パラダイムの格単位、能格系列と絶対格系列という独特の動詞人称接辞系列等のような、相呼応しながら一つの統一的な構造組織を構成せしめる意味的決定因子は何か。それは能格性 (агентив, agentive)・絶対格性 (фактитив, factitive) の原理である。能格性とは、「改造的行為 преобразующее действие の何らかの状況ないしは条件 (行為者 производитель действия、行為手段 инструмент、行為受信者 адресат)として説明できる」。従って、能格には「主体機能も間接客体的(具格的、所格的)な機能も存在している」(p.111)。また絶対格性の概念は、「行為の直接的担ぎ手 непосредственный носитель действия を包括するものである」(p.111)³⁴。

そこで、クリモフは、「能格性総論概説」で行った自らの能格性の定義を修正している：「従って、非他動的行為の主体を他動的行為の客体と同様に解釈し、他動的行為の主体は幾分区別して解釈するような、多くの記述研究や理論研究に広く行き渡っている能格構造組織の定義は、正確さを欠くばかりでなく(行為の他動詞性と非他動性を援用している故に)、不完全である、と認定しなければならない。この定義は、ここで行われている他動的行為の主体と間接客体の解釈の重なりを考慮していないからである。……(本書

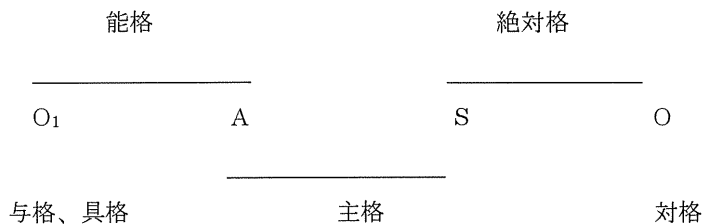
(i- は「自分自身」を表す間接客体マーカー)に替えれば、「～自分のために家を建てる」から主体相；*u-šen·eb·s* (*u-* は3人称間接客体マーカー)に替えれば、「～彼のために家を建てる」から客体相→ *mezobel·i saxl·s u-šen·eb·s jma·s* (兄弟・与格)「隣人が・家を・彼のために建てる・兄弟」→「隣人が兄弟の(ために)家を建てる」。なお、グルジア語は対格・与格機能を「与格」に融合。

³⁴ キブリクはこの概念を特徴付けて、「場の最も近い参与項 ближайший партиципant ситуации 一場に直接的に関与する共演項 актант, принимающий в ней непосредственное участие」とする (p.111)。

の筆者も、過去において、能格的文類型の定義を定式化しようとしてこの不完全さを免れることができなかった」(p.111)³⁵。また、「最近数年間の研究(とりわけキブリクの諸研究)によって初めて、能格性の内的な内容的刺激動因の的確な理解に到達することができたのであって」(p.121)、それまでは、クリモフ自身、活格構造や主格構造の意味的決定因子の鮮明度に比して能格構造のその鮮明度が劣るという印象を持っており、能格構造に「内的矛盾」を感じていたことを述懐している (p.121)。

以上が体系として相呼応する語彙、統語、形態レベルの各類型内諸特徴の縦断的記述であったとすれば、以下での大きなテーマは各類型諸特徴の横断的観察、対比、相関性の記述である。そこで、記述は、① 各類型の基軸的意味・統語関係—普遍的な意味的素因子 (universal semantic primitives, semantic primes)—の相関的構造式の提示(特にディクソン構想に対比して)、② 各類型間の構造的諸特徴の横断的対比、論理的に逐次連続的な相関関係の提示、類型混合あるいは分裂のケースの考察、③その他諸類型の構想批判、へと続いている。

① クリモフは、以上のような能格構造の認識に立ってディクソン構想を下図のように修正することを提案している(ただし、非他動的行為の主体=S[subject], 他動詞行為の主体=A[gent], 他動詞行為の客体=O[object])。クリモフとディクソンとの違いは、間接客体 O_1 を加えて構造式を設定している点だけである (ディクソンの構造式では、能格軸はAだけで O_1 は含まれない³⁶) :



クリモフは、上述のように、能格・絶対格 (agentive-factitive) 原理(能格原理=A+ O_1 ; 絶対格原理=S+O) に立った能格は、他動的行為主体の機能だけでなく間接客体(与格、具格等)機能を包含していると認識しているからである。ただし、クリモフの次のような発言を考慮しておく必要があると思われる:「絶対動詞 (factitive v.) 類には(その統語的かつ形態的ポテンシャル全部を含めて)、他動的意味の様々な動詞—客体に対する表面的

³⁵ Г.А. Климов, Очерк общей теории эргативности, 1973, стр.48 ; cf. R.M.W. Dixon, Ergativity, Cambridge University Press, 1994, p.16-17 : “if S and O are treated as equivalent (functioning as syntactic pivot) and A is treated differently, then the language is said to be ergative”.

³⁶ cf. Dixon 同書 p.9

な作用を表す動詞—も入っているのだから、factitive 機能としての S と O の組み合わせにはある種の A を補うべきではないか、という問題が起ってくる。このことを念頭に置きながら」(p.113) の提起である。

活格構造言語の基本的意味機能の場合は、能格構造の場合ほど難しいことではない。活性原理と不活性原理は $A + S$ (活性原理) $\sim S + O + O_1$ (不活性原理) の構造式で示すことができる(ただし、非他動的行為が活性的行為であることも不活性的行為であることもあるため S を両原理に含めているが、前者は S_1 、後者は S_2 として区別する方がよい、と注記)。

類別型言語には、名詞類別や動詞形態の類別接辞の存在から、多数類別から有生・無生類別に至る類別を基礎とした構造化が行われていることは判るが、動詞語彙素類の固有の分類原理は不明である。まして、中立構造は他の諸類型に当てはまらないという消極的理由によって推定したものだから、その意味的刺激動因については不明である、とする。

なお、ここで、言語と思考の問題に関連したコメントが付されている：「言語的思考の中に言語類型の一定の意味的刺激動因があるということを承認しつつも、各言語類型の構造的特質の背後に言語の担い手達に何らかの固有の思考方法がある、とするヴント説の流れを汲む現代の新フンボルト主義の代表者には同調できない。……言語類型の意味的決定因子は、一定の言語的思考基準として現れているのであって、その基準は、客観的に実現される主体・客体関係の捉え方の的確性には全く影響を及ぼさないものであり、主体・客体的な関係はここに仮定されるあらゆる類型組織の言語の話者には全く同じ様に観念されるものである」(p.114・115)。まして、能格類型における原始的思考とか前論理的思考という議論は論外だとしている。

② 各類型間の構造的諸特徴の横断的対比によるそれらの論理的に逐次連続的な相関関係の提示。類型混合あるいは分裂のケースに関する考察。

ディアテシス：主格言語では他動詞にのみ機能する能動態と受動態。能格言語では、ディアテシスは能格動詞と絶対動詞ではなく、非生産的な動詞類であるいわゆる可変動詞にのみ発現し得るもので、それは逆能動 *antipassive* と逆受動(逆受身) *antipassive* の対立である。ただし、既述のように、クリモフはこれ等の認定に懐疑的であり、『逆能動』という用語は 1968 年頃一般能格論に現れた非常に不適切な用語「逆受動」への

パラレルとして導入された」(p.115)、としている³⁷。その参考例はロシア語で挙げられている—крестьянин занимается жжением дров「農夫が・薪に・燃やし作業をしている」～дрова горят, сжигаются「薪が・燃える」(p.115-116)。活格言語でディアテシスを有するのは活格動詞だけであり、それは遠心相と非遠心相＝求心相の対立である—мать сушит личья「母が・乾かす・木の葉を」～ листья сохнут「木の葉が・乾く」。

その他各類型の包含事象を横断的に対比すると、各類型は主体・客体関係の伝達への適応度に従う論理的な逐次連続的の相関関係(類別型—活格型—能格型—主格型)として横一列に並べられる。例えば語彙素面で見ると、主格言語の他動詞と自動詞「燃やす」と「燃える」；「落とす」と「落ちる」；「引きずる」と「這いずる」；「目覚めさせる」と「目覚める」；「連れ行く」と「行く」等々の対立に一義的に現れる、主体的あるいは客体的意味価(intention)。能格言語の能格動詞と絶対動詞の主体・客体的意味価の融合性、未分化性(cf. 意味的他動詞も含む絶対動詞の意味価)。活格言語の意味価のさらなる未分化拡散性：cf. 同一語彙素としての活格動詞「燃える・燃やす」「落とす・落ちる」等の意味価。また形態面で見ても、例えば人称接辞系列や格パラダイムの主体・客体関係への伝達適応度が少しずつずれて行く様子が窺われる。左列ほどこの関係への適応度は低く、右列ほど高い。

また、類別型から主格型へ向かうに従って、語彙的手段から文法手段へと、「他のあらゆる構造レベルをこの関係の表現に引き込むことによって」主体・客体関係の伝達手段の規模・範囲そのものも拡大して行くことが判明する。例えば、類別型では語彙が最大の機能的負担を担っているのに対して、主格言語では語彙の機能的負担は最小であること、すなわち重心が語彙から文法へと移って行くこと(主格言語では内容的に規定される名詞分類が存在せず、他動詞類と自動詞類への区分が高い抽象度を持つこと；類別型では形態と語形成が未分化であるのに対して、主格言語では形態が最大限の発達を示すこと等)。

これは結局各類型の意味的決定子によって規定される。この面での主格構造と類別構造の類型的距離、類型的隔たり(типологическое расстояние[typological distance])

³⁷ cf. Dixon 同書 p.13, 17 他—“Underlying A becomes S of the antipassive, underlying O goes into dative case”；キブrikのツェズ諸語(ベジチン語)例に拠れば、能格構文 ist'I (erg 兄弟) ti (nom 水) RarLolca (沸かす) = Брат кипятит воду に対して、逆受身構文 is (nom 兄弟) lid (inst 水) RarLol·da·c (anti-passive 沸かす) = Брат занимается кипячением воды「湯沸しを業とする」での行為は「Agensの恒常的、規則的特徴を表す」という。したがって、統語的変形操作というよりは、語派生操作であり、両文の意味は異なるとする。cf. A.E. Кибрик, Константы и переменные языка, Алетейя, 2003, стр.612-613

(p.122)は最大である。クリモフのいう「類型的距離」の証例を図示化すると：

類別型	活格型	能格型	主格型
バントゥー語（著しく活格型よりの類別型言語）			
ナ・デネ語（幾分類別型特徴を持つ活格型）			
	アプハズ・アディゲ語（活格構造要素をもつ能格言語）		
	エスキモー・アリュート語（同上）		
	ナフ・ダゲスタン語（能格性優勢だが著しい主格化傾向も示す）		
	（基本は主格型だが活格的残滓要素を保存）カルトヴェリ語		
		（同上）エニセイ諸語	

類別構造内の安定した類別機能対立が抽象度を増して有生・無生対立へと進むに従って、それは活格構造の活性・不活性対立に接近することになり、それはまた能格・絶対格原理との一定の連関性を見せる一方で(長い間能格型と活格型の混同はその証拠)、能格・絶対格原理は主体・客体原理への接近性も顕している。対類別型という点で活格、能格、主格型の三型には特に相互に構造的近接性、共通性がある。a)「性格的に安定した類別対立」と異なり、活格、能格・主格組織は「不安定な対立の基礎の上に築かれている」(p.119)―クリモフは随所で「安定」「不安定」を言うが、そこには、類別構造原理による現実描写は客観的現実の模写、写実の原理によるため「安定」しているが、それ以外ではそこに主観的因子の介在が加わりまたその介在程度が強まるため不安定性が増す、という感触を述べたものと思われる、b) 言語構造全体にとっての動詞語の語彙化原理が基幹的な重要性を持つこと、c) 名詞形態(特に格パラダイム、所有性範疇)の存在。

実際に観察される事例も類型的距離の目盛上で様々に各類型構造の諸特徴の混合あるいは類型分裂の事例を示す。三つの類型の特徴が共存する事例がないではないが(例えば上図のナフ・ダゲスタン諸語の支配的優勢的要素は能格性で従属的要素として主格性があり、個々には活格性要素もあるという)、通常は隣接する二つの類型の特徴が混合するのが原則である。そこで、混合あるいは分裂する場合のあり方の議論に移って行く。

先ず第一には、a) 時制間分裂(過去時制＝能格型～現在時制＝主格型)：インド・イラン、ナフ・ダゲスタン、カルトヴェリ諸語等、b) 名詞指示物の能格性目盛(人称代名詞―固有名詞―普通名詞[人間―有生―無生])上での位置による分裂(人称代名詞＝主格型～それ以外の名詞＝能格型)：オーストラリア諸語等、c) 名詞成分と動詞成分の分裂

(名詞成分＝主格型～動詞成分＝能格型)：ムリンパタ語(オーストラリア)等、について。

第二に、言語レベル(統語と形態)における混合あるいは分裂のあり方に関する議論である。この場合、コムリー初め多くの研究者が、能格性は形態レベルに、主格性は統語レベルに現れる、という見解に達している。全体としてこうした結論が事態の正確な反映であるには違いないが、これの直線的、機械的定式化傾向には警告を発している。文類型というコード特性(すなわち能格構文と絶対構文の相関性とかその環境下での「直接」補語と「間接」補語の機能化等)の無視、あるいはまた言語構造一般に対する体系的アプローチの欠如、しかも能格構造原理に対する不完全な理解に立った結論に注意を喚起している。異類型の構造要素が混合する場合でも、第一に、専門系特徴(профилирующий характер [profiling character])＝優勢支配的な要素と従たる要素が確定できること、第二に、優勢支配的な要素は従たる要素の中にも発現すること、第三に、従たる要素が優勢支配的な要素の中にも見出せること、を指摘している。つまり「統語と形態が不浸透な障壁によって仕切られておらず、むしろ統語が形態の一定の特徴を規定する」(p.126)のであるから、混合の認識に当って、能格性が形態面だけでなくある程度統語面にも現象化すること、また主格性統語構造を基本とする場合に形態面の能格性を過大視すべきでないこと、という二点の注意である。第1章との関連で言えば、クリモフのこうした警告は、ディクソン等欧米の傾向の中に、能格型とは混合型であるとするような前提、あるいはまた混合型を一つの類型とするような見解、が見られるからであろうと思われる³⁸。本稿筆者の言葉で言えば、混合あるいは分裂の場合に、言語構造総体としての主導的構造化因子は相対的に確定できるのであるから、この相対性の中に客観的真理は見出せる、つまり能格型等々を確定できるのである。

ところが、主格性は統語法に、能格性は形態により鮮明に現れる、という一般的に認知されている定式化とは全く逆の解釈を行うケースとして、オーストラリアのディルバル語に関するディクソンの研究が取上げられている(p.128-131)。統語構造は一貫して能格性規範に従う一方で、形態は主格性規範に傾く、というのである。すなわち、1, 2人称代名詞の曲用パラダイム(形態)は主格・対格型(A=S=Ø // O=-na)である一方で、その他の代名詞や名詞一般は能格・絶対格統語法(A=-ngu // S=O=Ø)を取る、という例

³⁸ cf. ディルバル語の記述に際してのディクソンの発言：「形態レベルと統語レベルの両方で能格的なものは存在しない。……存在するのは、統語機能をマークするために能格パターンを持ちながら、同時にS/Aピヴォットに従って作動するすなわち対格統語法を持つ言語である」等(Dixon同書p.14)。

である³⁹：

nana「我々」主格 numa「父」絶対格 bura-n「見た」

nana-na「我々」対格 numa-ngu「父」能格 bura-n「見た」

クリモフはこの認識自体に対して、三点の批判をしている：1) 一つの文の中に異なる類型組織の形態特徴が機械的に重合すること(主格と絶対格；能格と対格の重合)は体系性の観点からしてあり得ないこと、2) 能格言語の主格化傾向は、先ずは名詞形態でなく動詞形態の類型的再編に発現することが前提であること、3) デイルバル語の統語法は一貫した能格性原理に従う以上、一部断片的に主格性規範の曲用パラダイムが機能するための統語的前提が欠如していること。要するに、任意の事象の体系総体から見た位置づけの必要性、そして言語構造体内の階層的依存関係性(語彙—統語—形態—形態音素)の認識欠如、という批判といえよう。その上で、1, 2人称代名詞の形態対立(-o // -na 対立)に主格性を見出す根拠がないこと、オーストラリア諸語に広く見られる類似の対立の機能特徴による検証が必要であり、特にオーストラリアのアランタ語の -na 指標は有生客体の不活性性を表すものであり、本来的な格語尾でないこと(1, 2人称代名詞が格変化を持たないことは、能格言語では珍しくない現象)、ここでは動詞の形態構造が主体・客体関係を表すものでない以上、1, 2人称代名詞分野の形態対立(-o // -na 対立)は、実は活性//不活性あるいは能格性//絶対格性(agentive//factitive)の唯一の形式的弁別手段である可能性、したがって、性格的には主格構造ではなく活格構造よりに傾く形態的古体(archaism)特徴である可能性(オーストラリア諸語の一部では、-na マーカーにおける直接客体と間接客体の機能の未分化であることもこのことを裏付けること)を提起している。また代名詞組織こそ古体保存の分野であるという一般的法則性に注意を向けている。

③ その他諸類型批判。関係文法のいくつかの研究では、立証される言語組織ではなく論理的に仮定される構造特徴集合に拠って、いくつかの別類型が仮説されるという：逆能格型(antiergative type)、逆対格型(antiaccusative)=逆主格型(antinominative)、三分型(tripartite)、ゼロ型、所有型。しかし、これらは全て内容的基準に拠らず、言語組織の断片の形式的基準によって提起されるもので、いわゆる言語内類型にすぎず、既述の言語類型と同列に置けない、という批判が置かれている。最後に、自然分類としての content 類型学的分類と人為的分類としての形式類型学的分類の区別について述べている。

³⁹ Dixon 同書 p.15 他。

第3章 内容型学研究の歴史的側面

言語類型学は共時面だけを取り扱えばよいという意見には与することはできない。言語学史の発展論理が示したように、言語の本質の解明にとってそれ以上に重要なのは通時的側面である。ここでクリモフはグフマン報告「言語の変化と発展過程の区別によせて」を引用しながら(p.139)⁴⁰、変化(изменение)と発展(развитие)の峻別を説く。通時的類型学は、言語構造の変化ではなく発展という理念から出発する場合にのみ、歴史の基盤に立てるものであることを強調しながら、類型学研究が直面する課題を次の二大側面で定式化している。1) 語彙と文法範疇の歴史的な性格というテーゼの論証、2) 納得のいく進化学説の提起。したがって、言語の発展そのものを示す任務は起源言語学の課題というよりむしろ類型学の課題であるとする。

次いで、記述は通時類型学の系譜とその評価の問題へ移って行く。フンボルト、サピア、30-40年代のソヴィエト言語学等を振り返っている。とりわけサピアを引用しながら⁴¹、「サピアの類型的分類は歴史問題そのものを検討した訳ではないけれども、言語を歴史的産物と看做した彼の言語学説全体は、世界の諸言語に観察される構造的類似性を歴史的に解釈する可能性をともかくも完全に考慮したものであった」(p.141)、と総括している。また30-40年代のソヴィエト言語学とそれ以後に対しては、「なおさら奇異に思われることは、30-40年代のわが国の多数の刊行物が言語の歴史的発展説を論証しようとする真剣な試みを行った直後に史的類型学的な問題群への関心が非常に弱まり、それに続く科学史のほとんど全体が歴史的問題群そのものの検討を忌避した通時的類型論の絶対的支配を特徴としたことである」(p.142)、と評価している。勿論、これは「新言語学」路線に対するスターリンの容喙以後に起る二者択一的な極端への傾斜状況を指したものであろう。その上で、当時構築された進化学説が方法論的基盤、一次的記述の信頼性等から見て未熟であったことは否めないが、だからといって「類型的進化に一定の逐次連続性(последовательность)があることを否定する二者択一的な考えに根拠があることにはならない。……言語学における段階説は何がしかの研究活動の伝統を持っており、反段階説に対してより有利な立場に立っている。……50年論争以後の全期間にわたって、内容類型学的な言語進化の非段階的性格を証明した研究は、結局一つたりとも

⁴⁰ 第2回全ソ言語学の理論的諸問題学会報告のテーゼ「言語発展の弁証法」(1980)におけるグフマンの報告。

⁴¹ クリモフ「新しい言語類型学」(三省堂1999)第5章冒頭(p.221)の引用文。

現れていないことに注意すべきである」(p.142)。

次は、史的類型学研究の理論と方法の問題の重要性についてである。主格構造記述に使う用語で異類型諸言語構造を記述する根強い傾向も、この問題に対する無関心に発するものである。過去の史的類型学研究の成功と失敗の分析から、任意の歴史的発展対象の研究に不可欠なのは、二つの原理—体系性と歴史主義—の徹底であり、かつ体系性原理は歴史主義原理の前提であり、歴史主義原理は体系性原理と一体であること。そこでこのことを軽視する諸例も挙げられる。例えば、「原始的な、非常に遅れた文化を持つ民族の言語だけが持つ」とする内包形 (inclusive) と排外形 (exclusive) に関するミレウスキ見解への批判⁴²、また起源言語学的な言語の系統分類以外は非科学的分類とするイサチェンコ批判等が展開されている。さらに、名詞の性分類に対する意味的な名詞分類の先行性とか、複数に対する双数の古体性とか、他動性の原初的未分化性とか、等々の諸事実が多数の諸言語研究において共通の研究場となっているが、これら個々の言語事象をそれらが属する言語の体系全体との関係で、また共時的な類型的相関関係の中で観察せず、「原子論的思考の支配下で」(p.146) 判断してしまう傾向に警告を発している。こうして先ずは体系性原理の重視の指摘、次いで体系性原理と類型(多レベル階層的依存関係特徴総体としての類型)概念の一体化の指摘である:「通時類型学に体系的アプローチを導入することと同研究をさらに徹底して言語類型の概念に立脚させること」(p.146)。

続いて歴史主義の問題。クリモフは、「本書の筆者は、歴史主義とは、歴史的に発展していく諸現象に対して、独自のアプローチの仕方を定め、したがって一定の方法論的武器を提供するある種の統一的な世界観である、とするテーゼを基本としている」(p.147)、と述べる。歴史主義原理は起源言語学の専有物ではなくなり、地域言語学にも広がって行ったが、世界の諸言語の人為的ではなく自然的分類である内容類型学的分類とは言語の類似的な歴史的発展の法則的結果であり偶然の徒の結果ではない、ことからしても、類型学にこそ歴史主義原理の導入が重要である、と。「普通、通時的文法だけが歴史文法と命名されるが、共時的文法も言語の歴史的発展の一段階に関わるものである限り、本質的には両文法とも歴史文法といってもよい」(p.148)、とするメシチャニーノフの発言

⁴² 前掲同書 p.216-217; ただし、クリモフは本書では、この区別が、活格、能格、主格言語では複数1人称だけに残るのに対して、類別型(バントゥー諸語)では全人称に及ぶことを指摘して、「先行研究の一つ(前掲同書 p.88-90-石田)で、両代名詞の区別の構造的動因性を類別組織に最も近接する活格組織内に求めようとしたことは、破棄せざるを得ない」(p.145)、と修正している。ミレウスキ批判は、歴史主義原理の前提は体系性原理でありそれと一体であるべきだという批判であろう。

を通じて、早くから歴史主義の気風を持っていた初期ソヴィエト言語学を肯定的に評価している。また、「50-60年代の著しい衰退期の後、それに続く年代にはこの問題群の研究は目立ってテンポを増し、具体的な諸言語の資料を基にした巨大な諸研究が世に出た」(p.149)として、その代表者グフマンのモノグラフ「史的類型学と通時的定数の問題」の意義について言及している。ここでのグフマンの注意の核心が、変化と発展という概念の峻別に関連して、不可逆的構造変化という問題に置かれたこと、また史的類型論の概念装置として「通時的定数 диахроническая константа [diachronic constant]」という概念が導入されたこと、に注意を向けている。「通時的定数」とは、「互いに起源、地域に関係のない諸言語に一定の頻度と常態性 узувальность⁴³をもって発生する単一指向性変化」(p.149)として定義されるという(後述参照)。史的類型論の研究の問題枠と方向性を明らかにしようとしたのである。

歴史主義原理の導入という問題に関連して、発展とは何か、という点に言及している。まず、形式類型学が言語の構造的変化が周期的性格を持つものに対して、内容類型学は言語の不可逆的な性格の構造的再編に関心を寄せる点が対比される。そして、内容類型学の三つの性格を挙げる：1) 特段の説明力があること、2) 不可逆的再編に関心を寄せること、3) 再構の時間的奥行きが深さ、したがって言語起源論 (glottogony) 問題の解明に寄与し得る展望。クリモフは、いわゆる未開言語を貶めることなく現代言語と等しく人間言語として等価であるとするバンヴニストの見解 (p.150) に同意すると同時に、言語諸類型が同一の言語発展段階を示したものとする見解は、言語が人間の行動要素全体の中に有機的に含まれている限り、反歴史主義の疑いがある、とした上で、「諸言語の最も重要な構造的差異に依拠して、仮定される言語諸類型の集合に何がしかの歴史的解釈を与えるという魅力的な考えも生まれてくる」(p.150) ことを目標とするのである。一方、発展という問題では、メシチャニーノフの研究を例にして、それが質的な性格を持つものだという事は30-40年代のソヴィエト言語学が再三定式化して来たにも拘らず、当時のソヴィエト言語学は形式的に孤立型言語の中に主格構造としての内容的、質的特徴を具体的に論証するには未熟であったことも指摘している。つまるところ、発展は、形式面だけでなく内容面に見るべきだ、という主張である。言語の歴史的変化は内容の変化ではなく形式的表出手段の変化に関わるものとしたサピア以来、内容類型学は確実な進歩を遂げ、「現代の言語学書では、あれこれの構造の歴史的前進性の客観的

⁴³ cf. 羅 usuālis、英 usual

基準をその構造の語彙的手段や文法的手段の内容面に求めようとする傾向が益々明確に現れて来ている」(p.151)。また、言語諸現象の古体性 (архаичность) の基準として「文法的抽象のより浅い形」をいうパンフィーロフやセレブレンニコフが紹介されている。

類型的再構 (типологическая реконструкция, typological reconstruction) の問題、類型学における補外推定法 (экстраполяция, extrapolation) の問題である。内容類型学の歴史的側面の検討は類型的再構の問題抜きに不完全になる。祖形 (архетип, archetype) の再構が起源 (比較歴史) 言語学の任務の一つであると同様に、類型学も独自の再構法を持つ必要がある。起源言語学の再構が祖形の物質的側面であるとすれば、類型学的再構はその機能的側面であり、例えば前者が印欧語の格要素 **-s//Ø* を引き出してきたとしても、主格、能格、活格の機能的特徴づけができるのは類型学レベルの判断であり、これなしには再構は不可能である。しかし、類型学的再構は比較言語学の補助手段としてでなく、言語学の自立分野特に言語学の通時的分野として確立しなければならない。そのためには類型学のアプローチとその他のあらゆる構造的な研究(対照言語学、性格学、言語普遍論等)との区別が必要であり、類型学本来の再構法 (algorithm) を完成させるべきである。

そこで先ず、類型学的再構法の模索の歴史を振り返っている。この問題は未だ専門的検討の対象になっていない。最近に至るまで成り行きの *ad hoc* な対応に止まり、それも起源言語学の方法論の枠内のこととされて来た。比較歴史言語学の裁量下にあった資料に基く「過去の多くの直感的な再構」の経験を経て、「類型学を基礎とする再構手順の最も初期の例」としてユーレンバクの例を挙げる：印欧語における中性名詞主・対格＝男・女性名詞対格の事実の確認を契機としてこれと「起源的には無縁の諸言語」との類推によって、印欧語に活格型構造の相関性(行為動詞と状態動詞；能動格と受動格の対立)を再構した例である。次いで、「なお完全に明示的提起ではないが、はるかに本格的に再構問題を提起しその解決を試みた」30・40年代のソヴィエト言語学の例を挙げる：「当時最も広く行われていた手順を簡単に特徴付けるとすれば、それは具体的言語のある先行状態の一種の内的再構と定義すべきもので、その言語の専門型特徴からすれば非体系的な諸現象の一定集合の分析を基にしてなされた再構であり、その再構の結果は言語の然るべき類型種全体を代表するものと認定された」(p.156-157)。メシチャニーノフは正にこの方法によって今日能格型を基本とするアプハズ語とアリユート語のいわゆる所有段階位相を再構し、ソヴィエト・ゲルマニストはゴート語、古代アイスランド語等ゲルマン諸語の残滓現象に基いて最古の印欧語に前主格状態(当時は能格状態)を再構しようと

した。またカツネリソンがオーストラリアのアランタ語の歴史に前能格段階位相を見た再構手順も同様である。この内的再構の欠陥を克服し得るのは比較的再構であったが、当時はまだ十分にそれを駆使し得なかった⁴⁴。「各構造的現象を再構して行く途上で諸言語の一定集合の証例を勘案するというやり方で、一定の類型種に属する一連の諸言語の横断的な証例に立脚するため、比較的再構と認定して然るべき類型的再構法」(p.157)を取ったのはクリモフである⁴⁵。しかし今日に至るも起源的再構と類型的再構の区別の問題は完全には明らかになっていない。両者の判断が絡み合って複雑化する例として、類型学レベルの基準を用いるガムクレリゼ、ヴァチェスラフ・イワノフによる印欧語子音組織再構の検証問題が挙げられる(いわゆる「声門説 glottal theory」⁴⁶について述べたと思われるが、ここでクリモフ自身は直接判断を下してはいない)。

再構の何れを取るか、という問題には直接応えるのではなく、具体的なケースに応じた判断について述べ、しかる後に、類型学的補外推論 (typological extrapolation) の問題の未熟さを克服して行く前提は、先ずは、言語における構造的諸特徴の階層的依存関係を勘案しながら体系的なアプローチの原理を徹底することであるとする。直接的にはこの補外法の基礎になるのは世界の諸言語の構造的変化の「一般的傾向と個別的傾向の確定」(p.159)であり、これはグフマンの「通時的定数」(上述参照)等もそうしたものであるが⁴⁷、これが当面未完成であることにも注意を向け、グフマンの意図が体系的再構の必要性であること、この種の法則性基準が信頼度を得るためには類型学が先ず成し遂げるべきこととして、「言語構造の多レベルの諸事実間に存在する連係包含的な諸関係を最大漏らさず明らかにすることが特に重要であると思われる。言語類型の概念に通常内包されているこうした依存関係の集合セットは、あれこれの構造的諸現象の類型的な適合性あるいは逆に非適合性を示すことを可能にするのであり、このことを考慮せずし

⁴⁴ 「再構手順の未熟さの故に……30・40年代のソヴィエト言語学的内容類型学的な分類で仮説された言語諸類型の中で科学に一般化したのは主格型の能格型だけであり、抱合型、所有型他は歴史の試練に堪え得なかった」(p.155)。「ソ連邦における類型学研究(20・40年代)」(註1「科研報告書」p.289)にも、「その後の類型学研究が裏付け得なかったいくつかの言語類型の再構」に終わったこと、また「比較的再構の可能性を考慮しなかったために、現有の実際資料からそれが容易に可能である場合にさえ、的確な結論を得ることが難しかった」、という内的再構の欠陥や限界について指摘されている。

⁴⁵ cf. クリモフ「新しい言語類型学」(三省堂1999)第5章、同「能格性総論概説」第5章(Г.А. Климов, Очерк общ. теории эрг.).

⁴⁶ cf. 山口巖「類型学序説」(1995)p.217-232他。

⁴⁷ cf. 例えばクリラーヴィチのいう、動作態(Aktionsart) > 時制; 相(version) > 態(voice); 活格 > 主格; 類 > 性; 集合性 > 複数; 状態動詞 > 完了(perfectum) > 不定過去(アオリスト)、等々の不可逆的な構造的再編過程の一定の総和も。

ては類型的再構はあり得ない」(p.160)。例えば、能格構造総体を、語彙(能格動詞と絶対動詞の対立)、統語(能格構文と絶対構文の対立)、形態(能格と絶対格、能格系列と絶対格系列の人称接辞の対立)の階層的依存関係のセットとして提示できるのであるから、主格言語が個々の能格性残滓を見せる場合その一定年代レベルの過去に対して能格性の類型的集合セット全体を再構する可能性が出て来る訳である。

また言語構造体＝類型における論理的な階層的依存関係性が重要なのは、それが類型の歴史的な変化の方向性に反映すると見られるからである。その際、指針とすべき最も一般的な原理は、語彙の文法に対する一次性というテーゼ、さらに続いて、統語に対する形態の従属的地位というテーゼである。これは内容類型学にとっても基本的なテーゼであり、類型シフトの方向性を明らかにする指針(ориентир)である。「言語構造諸要素の自然的な階層性は、高次レベルの現象から低次レベルの現象の派生が論理的であるばかりでなく歴史的なものであること、すなわち語彙から統語へさらに形態と形態音素へと進む一定の下降的従属関係を反映したもの」(p.164)である。語彙－統語－形態－形態音素という体系組織的な、従って論理的な階層的依存関係の「転置 transposition」の原理は、類型の一般的な歴史的発展方向原理でもある。ここではヴィノグラードフを引用して同原理が一般的に認知された原理であることを繰り返している:「形態上の形はすなわち沈殿した統語形式である。形態には統語や語彙に存在しない、また以前存在しなかったものは何も存在しない。形態要素と形態範疇の歴史は、すなわち統語的境界線の変移の歴史である」(p.164)。メイエの「形態は残滓が保存される分野である」(「史的言語学における比較の方法」)、とする発言も紹介される(p.166)⁴⁸。このことはすでに前書でもクリモフが繰り返し強調している最重要点である⁴⁹。してみれば、過去の類型状態を再構する多数の経験が諸言語の形態的諸特徴に基くものであったことも偶然ではない。このような「転置」原理の経験実例的な例についても言及される。例えば、かつての語彙レベルの特徴を形態レベルへ転置するアディゲ語例(活格性～状態性特徴による動词语彙素の対立を単一語彙素としての動態形～静態形へ変換する例): ущытын

⁴⁸ cf. A. メイエ (泉井久之助訳)「史的言語学における比較の方法」(みすず書房 1977) p.154

⁴⁹ 「この原理からすれば、最も可動的で前進的なのは……語彙レベルであり、逆に最も保守的なのは……このためしばしば形式的に後進的であるが……形態レベルである(……形式類型学が分類、区別する言語類型の内的変化の法則性は全く別の様相を呈する)。この原理は、『形態的単位の意義は語彙的な単位の一部と統語的な単位の一部の転置(transposition)である』……とするスカリチカの周知のテーゼとも一致する。……したがって、新しい類型的状态の要素は先ず語彙の構造化原理に発現し、逆に先行期の類型的状态の要素は特に形態組織において強固である。……この原理は、語彙的なものの一次性と文法的なものの二次性という、すでに理論言語学においては実際かなり一般化しているテーゼと一致する」(「新しい言語類型学」三省堂 p.55-56)。

(=стоять, простаивать)「立っている、立ち尽す」> щеты (=простаивает)「立ち尽す」, щыт (=стоит)「立っている」。その他、カルトヴェリ語の情緒動詞という語彙類の崩壊が不随意形(相関受動の指標)として転置される例、また内包類と排外類の語彙的対立を内包形と排外形として転置再編する例が挙げられている。

その他、再構問題に関連して、言語における構造的改新 (innovation) と古体 (archaism) の絶対的な性格ではなく相対的な性格という関係、改新あるいは古体性を確定する基準について、起源言語学では祖形を起点として定めるが、類型学では類型を基準として定めること、形式類型学的な再編(例えば屈折構造から分析構造への変換を見せる英語史)テンポに比して内容類型学的な再編テンポは極めて緩慢であること、再構の限界は homo sapiens の存在の年代枠までであって無限ではないこと、等についても論じている。

本稿筆者なりに、以上の再構問題についてのクリモフの主張を簡単に纏めるとすれば、類型学が必要とする自立的再構手順、再構法の基礎となるべきは、先ず、体系性と歴史主義原理の統一、形式と内容の弁証法についての自覚を大前提として、①「諸言語の構造的変化の一般的傾向と個別的傾向の確定」(グフマンのいう「通時的定数」の確定も含めて)であること、② その最も一般的な原理は、語彙の文法に対する一次性、さらに統語の形態に対する一次性のような下降的波及関係の原理、すなわち「転置」の原理であり、また「代償発展」の原理であること、③ 経験実際のな個別的傾向性事例の蓄積：通時的変化における核は動詞語であり、動詞形態タイプこそが歴史的優先性 (примат) を有すること(動詞型→混合型→名詞型)、あるいはまた以下に例証される不可逆的發展の論証集合②の意味と形態の関係の事例 (本稿 p.94-95)、また例えば、現在不完全であるが、動作態> 時制、類> 性、等々の再編過程 (cf. 註 47) のような個別事例の蓄積、等々であろう。

次は各類型間の歴史的連関性、相関性の問題、類型の不可逆的發展の問題「内容類型学的分類の歴史的解釈の可能性に関する問題」。上述では、内容類型学が分類した各類型間の関係を論理的な横断関係すなわち体系間の論理的な関係 (cf. 上述の「類型的距離」) から観察したのであるが、今度はそれを歴史的な連続的發展過程として提示する可能性について論ずるのである。当該問題の理論的検討が焦眉の問題であるにも拘らず、再構問題は勿論「過去に一度ならず信用を失墜したこの問題」(p.169) の検討が始まるのはようやく現代類型学においてであって、当面断定的な結論を引き出すことは時期尚早であること、したがって類型から類型への「不可逆的發展の可能性を推定させる若干の一

般論的な問題の考察に限る」(p.170)と断った上で、不可逆的發展の論証集合をおよそ次の四点に絞って挙げている⁵⁰。

① 類型表(本稿 p.70) 左列組織が右列組織に対して高い説明力を持つこと。例えば、活格構造(左列)の特徴は、能格あるいは主格構造言語(右列)における多数の非体系的な諸事象(特に形態のような最も保守的なレベル内に見られる)、すなわち能格構造体系あるいは主格構造体系に矛盾する事象(体系に反するズレ)の解釈に著しい解析力を持つこと、あるいは、活格構造内の非体系的諸事象の説明材料を類別構造が提供すること、等。印欧語の名詞形態から印欧祖語の前主格構造を仮説したユーレンベクや北米諸語、バスク語、カバルダ語を対比しながら、能格言語における絶対構文の無客体動詞は自動詞に移行することをもって能格の前段階に活格構造を推定したプイホフスカヤ等々が例として挙げられる。逆に、左列(活格構造)に発生する改新(左列にとっての非体系的な事象)の説明を右列(能格構造や主格構造)に見出すことも出来る。

② 中間列に位置する言語類型の構造要素の形式と内容間に存在する弁証法的な関係。例えば、能格構文の形式と内容の間に存する弁証法的関係：表現面では、未だに活格構文の三項文種すなわち主語述語以外に近い補語を組み込む文種(cf. 名詞成分に対する動詞述語の著しい支配性、SOV 語順、構文を構成する諸要素の形態特徴全体)に一致しているのに対して、内容面ではすでに相当程度、主格構造の主格構文に接近した主体・客体関係の伝達に適応している(cf. 他動的行為と自動的行為の弁別、「直接」客体と「間接」客体の区別等)こと⁵¹。

この点に関連して、意味と形態との次のような相関性、法則性についての指摘がある。すなわち、「新しい文法範疇が生成していく時には、その機能面は明確である一方でその生成過程に巻き込まれる形態素は多様化するが、逆に文法範疇が消滅していく時にはその具現形(exponent)成分の極限までの一元化が進む一方でその形の機能的任務に揺らぎが生じて来る」(p.172)。ここでアンドレーエフの発言も取上げている：「文法現象が意味との連関性を弱めると、安定性を失って結局は言語組織から排除される確率が高くなる。また逆に、全ての新しい言語現象は意味的要素の機能の規則化が敷居を越えると文法化し始める」(p.172)。これを本稿筆者なりに言い換えれば、意識分野に新しい意味表現の必要性が生じかつその必要性が反復あるいは規則化する時には、その具現化のた

⁵⁰ 同様の簡単な論証集合については、クリモフ「新しい言語類型学」(三省堂 p.154・155, 243・244)にも示される。

⁵¹ cf. 「新しい言語類型学」p.154

めの多様な努力がなされ、結果として形態素等の多様化が起る。これはつまり言語構造の改新時の状態である。ところが、意識分野の諸作用(認識の深化、整理等)の結果その意味機能の必要性が減退するときには、意味に変化、揺らぎが生ずる一方で、形態素等具現形は意味との連関性を失って、その一元化が進んで行く。これはつまり形態素等の化石化を示すのであるから、言語の古体性、言語の過去の状態を表すことになる。[形態素等の意味機能の明確性—多形態素性 *многоформантность*—改新過程・状態]と[形態素等の意味機能の揺らぎ・多義性 *многозначность*—形態の一元化—古体性・過去の状態]という相関関係である。例えば活格構造と能格(あるいは主格)構造の混合を示す言語で、形態素の多様性の一方でその意味機能が明確である場合、その多形態素が表すのは活格性要素でなく能格性要素である、つまりこれは改新過程を示している。この過程はカルトヴェリ諸語、アプハズ・アディゲ諸語に追跡できるという。例えばカルトヴェリ語の比較文法では、態 (voice) のような後発的発展のものは多形態素性 (cf. いわゆる無徴受動、また *i, e*-接頭辞付きあるいは *-d, -n* 接尾辞付き受動) で現れることがよく知られているという。つまり態範疇は改新性を示すことになる。逆に受動接頭辞形の意味の多義性 (気分、外見性、可能性、不随意性の意味を混濁させる) は、かつてはあった同質の「共通」の意義からの揺らぎであり、その過去を暗示することになる。またアディゲ語の能格性は多形態素が担い、改新的性格であることを証明するという。逆に、共通アプハズ・アディゲ語の求心形と遠心形に遡及する母音交替 (*a~ə*) の機能の多義性は、活格構造に起因する古体的性格を表すことになるという。この点に関しては、アプハズ・アディゲ語の現状は初期能格状態と規定すべきだ、とするカフカース学者カール・シュミットの見解も紹介されている (p.173)。

③ 二つの言語類型の構造要素が混合する場合、構造レベル面の分裂のあり方に特徴があること。例えば主格、能格の構造要素が混合するいわゆる分離能格性 (*split ergativity*) の場合、能格性は形態のような保守的なレベルに、主格性はより高次レベルの、したがってより前進的な統語レベルに配分される、という分裂の様相を呈すること。現在までのところ、この分裂を逆に (主格性原理を形態面に) 顕す確証例はないとしている。また活格性と主格性の重合を示すカルトヴェリ語の例でも、活格性は形態面に、主格性は統語面に顕著である。このことは、統語は形態に対してより高次に位置して形態より構造的再編を受けやすいという言語構造体の階層性原理、あるいはまた形態は語彙と統語の「転置」であるという原理、によく符合する。

④ 分離能格性が現れるどの場合も、能格構文あるいは能格式構文 (本稿註 23 参照)

は動詞型形態タイプでなく、名詞型形態タイプまたは少なくとも混合型形態タイプに現れるという法則性があること。この法則性は、このような場合、動詞述語の形態構造は、名詞の形式化に先立ってすでに主格構造の規範に従う形式化を受けていることを意味している。ここでは、プイホフスカヤの研究を引用しながら、名詞成分は能格性規範に従う一自立名詞、代名詞（動詞に接辞として組み込まれず、動詞とは独立して措定される代名詞、名詞）が表す主体が能格である一にも拘らず、3人称直接補語を持つ他動詞「半過去 imparfait」活用に組み込まれる主体人称接辞マーカーが歴史的には絶対格系列（能格系列でなく）のそれであって、能格主語一能格活用述語の一致呼応を示さず、能格主語一絶対活用述語のような組み合わせの「ブロークンな構文（ломаная конструкция）」を使うバスク語の例が挙げられる⁵²。また、その他諸言語にも見られる同様の主・述の相関性についても触れている。クリモフが前書ですでに定式化しているように、能格構造の場合も活格構造の場合も、それらが有する形態面から観た構文種の歴史的発展過程は動詞型→混合型→名詞型である⁵³。このことはまた、両構造の文の構造核あるいは主座標（главная координата）が先ずは動詞に置かれることも示している。「動詞の一致が能格・絶対格ないしは主格・対格的性格である一方で格形式が能格・絶対格的であるモデルを顕す言語はあり得るが、能格・絶対格原理の動詞の一致が主格・対格組織の格形式と結合する言語は存在しないだろう」（アンダーソン）；「実際、名詞の格形式には能格・絶対格をもち、動詞の一致には主格・対格形式を持つ言語は多数存在する（逆の相関性は稀にしかあるいは一般に存在しない）」（コムリー）（p.175-176）の共時的定式化も、名詞格と動詞構造化との歴史的相関性についての内容類型学の定式化を確認させるのである。クリモフは、「このような相関性が表すのは唯一つのこと、すなわちこのような場合における能格（活格）類型的要素の、主格類型的要素に対する第一次性である。主格組織を能格ないしは活格組織へ変換して行く逆向きの可能性を示す同レベルの証拠になり得るのは、このような場合に、他動詞を能格（resp 活格）動詞に転換していくという事実を背景とした動詞型の能格（resp 活格）構文が現れることだけであろう」（p.176）、と述べている。

⁵² ne·gien「私はそれをしていた」、ne·kien「私はそれを知っていた」、ne·karren「私はそれを運んでいた」等。

⁵³ 統語関係を全て動詞語に組み込むタイプが動詞型；動詞にも名詞にもその関係を反映させるタイプが混合型；この関係の表現手段が名詞にのみ現れるタイプが名詞型。名詞曲用の未発達段階では動詞型であるが、動詞型を残しながらも不十分ながら名詞曲用の発達が萌芽して来て動詞語を補償する混合型を経て、曲用発達段階で名詞型が現れる。cf. クリモフ「新しい言語類型学」（三省堂 p.47-49 他）；Г.А. Климов, Очерк общ. теории эрг., 1973, стр.54 他（「能格性総論概説」）。

以上四点の不可逆性論証集合に次いで、一般に言語史における主格構造の生成が晩生的、後発的であることを裏付ける「一連の個別的な諸事象」が列挙される：例えば、動詞不定詞の生成は主格言語や一部の能格言語にのみ知られること；主格構造にのみ存在する所有動詞（*verba habendi*）。その他、動作態範疇と時制、不随意行為・状態動詞と情緒動詞、可変動詞、能動・中動対立等、個々の事象の歴史的相関性（cf. 上記グフマン「通時的定数」）の例示。時制形態の範疇の後発性とそれに対する動作態範疇の先行性（前者から後者への再編過程が活格あるいは能格組織から主格組織への再編過程に対応すると主張する研究者もあること、また動作態範疇の客観性に対する時制範疇の主観性の指摘）；活格言語の包含事象である不随意行為・状態動詞は能格言語や主格言語では規模が縮小され情緒動詞群として残滓する、すなわち随件事象化すること；また活格動詞から派生した可変動詞（拡散動詞）群の能格言語における残滓的存在；また活格動詞の遠心相と求心相（非遠心相）の弁別機能を有する母音交替が、今日多数の能格言語や主格言語に追跡される遠心的行為や求心的行為の弁別機能での狭母音と広母音の交替に再編された可能性の指摘があり、アルゴンキン諸語、アプハズ・アディゲ諸語、カルトヴェリ諸語、シナ・チベット諸語、印欧語、セム諸語の例が示されている。例えば、印欧語の *e*~*o* 交替は能動態と中動態に繋がること；グルジア語 **i*~**a* の交替（求心的行為と遠心的行為）*i-tira* 「彼は泣いた」~ *a-tira* 「彼は(彼を)泣かせた」；アディゲ語 *ə*~*ы* 交替 *редзə* 「中へ投げる」*редзы* 「中から投げる」、等々が例示である。

経験的事実としても、上記類型の再編過程の不可逆性を裏付けるいくつかの証拠が示される。1) 主格、能格組織の何がしかの特徴を残す活格言語は存在しないこと（主格型から活格構造、能格構造を引き出せる先例は存在しないこと）、2) 先行主格構造を基にしてそこから能格構造への発展を示す一部の論者の試みは徒労であること（この点については、あらためて後述される）、3) 活格性の残滓特徴を残す能格、主格言語がかなり多数存在すること、4) いくつかの活格言語に類別組織の残滓現象が存在すること。

例えば、1) 活格言語の名詞形態に主、対、属、与格形を、また動詞形態に能動態と受動態、時制、数の形式の残滓を見出し得ないこと。名詞形態は一般に活格状態以前に見出せず、活格・不活格は真の格でないこと、また他動性・自動性特徴による語彙化は後期活格ないしは後期能格の状態にして初めて芽生えるものであること。2) 「オーストラリアの諸言語が先行の主格構造を基礎として能格構造を発展させたという見解は、オーストラリア言語学では受容されていない」（p.181）。また、アプハズ・アディゲ諸語あるいはナフ・ダゲスタン諸語における態対立の欠如が二次的現象でなく古来の特徴である

こと、多数の北カフカース諸語に見られる 1、2 人称代名詞の能格・絶対格の同音異義(アディゲ語 sa[rə]「私は・私を」、wa[rə]「君は・君を」等)は、先行の主・対格形の痕跡を表したものであろうか、これが前能格状態に起源を持つことを表すものであること、カフカース諸語の起源的三語群内それぞれに存在する 1 人称複数代名詞の二つの形(アディゲ語 ta/da) は主格と対格の補充形の対立ではなく、内包形と排外形の対立に起源を持つものであること; ナフ・ダゲスタン諸語の動詞活用に見られる主体原理あるいは主体・客体原理のような主格組織の特徴は改新であること、カフカース語学では属格、与格、具格は常に後発的な各单位と認定されること、カルトヴェリ語の他動詞の能動形と受動形の対立も明らかな改新であること、等の例を挙げながら、カフカース言語学の経験も同じ結論であることを示している。3) 30-40 年代にソヴィエト言語学が行った理論的推定、すなわち能格組織を主格組織へ再編して行く可能性についての推定は、現在では、「カルトヴェリ語、ナフ・ダゲスタン諸語、ブルシャスキ語、シナ・チベット諸語(なかなづくチベット・ビルマ諸語)、オーストラリア諸語、そして恐らくは、モンゴル諸語、ポリネシア諸語、いくつかのアメリカ諸語の事実」(p.183-184) によって証明されている。また、今日活格構造の痕跡を残す主格言語としては、「印欧諸語、アフロ・アジア諸語(セム・ハム諸語)、ドラヴィダ諸語、チュルク諸語、エニセイ諸語、ケチュマラ諸語、アラワック諸語、また死語の中ではフルリ・ウラルトゥ諸語、エラム語」(p.184-185) がある。これとの関連では、「後期活格言語ともすでにその基盤は主格言語とも認定される北米のガルフ諸語の証例」(p.185) にも触れている。また、現代の能格言語あるいは部分的な能格言語の内若干(アプハズ・アディゲ諸語、ナフ・ダゲスタン諸語、チベット・ビルマ諸語)でその歴史的過去に活格状態を再構する経験もあること。4) 類別構造から活格構造への再編についてはすでに前書に触れられているが⁵⁴、それ以前(30 年代) のいくつかの記述研究でもすでに曖昧な形ながら示唆されていたことである。この点に関連して、類別言語の中に、顕在的な名詞分類を有生類・無生類という二項対立にまでその類別を縮小して潜在的な分類へ変換していく過程が観察されるが、これは活格構造内の語彙の構造化原理を想起させるものであること、すなわち類別言語に見られる有生類と無生類の「安定的な相関関係」が活格言語の活性類・不活性類という「不安定な」対立に近似すること、類別的数詞組織や 3 人称所有形変化の類別的階層性のケースが活格言語に存在すること、も挙げられる。A. ヴィノグラードフの研究が引かれる。「様々な言語

⁵⁴ cf. クリモフ「新しい言語類型学」(三省堂) p.221-244

の類別組織が一様に、人間類(1, 2類)指標の規範化と共に有生～無生対立の発展方向に向かって単純化して行く過程は、恐らく偶然ではあり得ないだろう。恐らくパントゥー語の名詞分類組織は、ぼんやりと存在する対立を顕在化させるような、当該範疇の発展のポテンシャルを内に込めて構造化されているのであろう」(p.186-187)。

以上の「経験的事実」を締め括るに当って、活格、能格、主格言語の構造間の一定の相互近似性は歴史的隣接性を表すこと(したがって活格型が並外れて古体的だという考えは今日では維持できないこと)、これ等言語型は動詞語彙素が通時面でも一定の構造的支配要素(доминанта)であることによって一括できること、また世界の言語の圧倒的多数は主格言語と能格言語であり、残余の言語型は限られた分布域に属すること、が述べられる。

最後に類別構造から主格構造へ向けた不可逆的発展説ではなく、「二者択一式に」可逆的発展説を取るいくつかの研究を取上げて批判している。「筆者は、今日機能する言語の活格、能格構造が先行した主格構造から引き出されるような研究は一例も知らない」(p.186)。

先ずは、主格構造なしは能格構造から活格構造への逆行説批判。「活格性の諸特徴を、主格組織や能格組織の諸要素に対して歴史的に二次的だと看做す歴史的解釈の試みで筆者が知っているのは僅か二例」(p.188)として、主格型から活格型への構造的進化を遂げる英語の発展を主張するアロンソン説と、ダゲスタン諸語が総じて能格構造から主格構造化過程を迎える中で、その方言の一つタバサラン語の南方言では活格構造へ向けた構造的再編を行われているという推定を「チラッと мимоходом」述べたキブリク説を取り挙げている。例えば、アロンソンは、「活格組織総体からの一連の重要な逸脱」を認めながら、他動性～自動性対立の非関与性の増大、直接補語と間接補語の中和化、人間(有生)類～非人間(無生)類特徴による二項的名詞分類の兆し等によって活格構造化を主張するが、他動詞～自動詞から活格動詞～状態動詞への、直接補語～間接補語から近い補語～遠い補語への、転換、等のような活格組織の最も重要な特徴の形成傾向を証明できない以上、アロンソン説は受け入れ難い、とする。タバサラン語の絶対動詞(自動詞)に認められる随意性～不随意性による語形の区別—「私は滑る(随意的に)」と「私は滑る(不随意的に)」—を基にしたキブリク説にも、ここに活格言語の活格動詞と状態動詞の形成を見ることができないこと、この言語の南方言での他の構造特徴が北方言と同じく総じて主格化傾向を持つこと(cf. 北方言の主体なしは主体・客体的活用原理)、特に北方言とは異なって名詞の二項分類の中和化が進んでいること、「同一方言の異方向発展の先例は存

在しない」(p.190) こと、等を挙げて批判している。これ等の批判は、要するに、構造体系総体としての再編シフトではなく、体系を無視した個々の諸現象の指摘では不可逆発展説を覆せない、という批判であろう。

次いで、主格構造から能格構造への可逆的發展説の議論についてである。「現在では、歴史的に主格構造の特徴を持った言語の能格化の確かな先例など、唯の一例たりとも挙げることはできないだろう。主格状態から能格状態への構造的再編の解釈は全て、全体としては極めて少数であるが、それぞれの分野の研究が能格性一般理論とのコンタクトが不十分であることに起因する、という印象を受ける」(p.191)。以下、インド・イラン諸語、ポリネシア諸語、等の可逆説に関して検討されている。

インド・イラン諸語。その歴史的発展過程に主格構造の能格化過程があるかの如き「類型学者らの間に深く根ざす幻想」について、「先ずはこれ等諸語がまるで能格言語に属する(まして時に一貫した能格言語である)かのような誤解を捨てる必要がある」(p.191)。能動文・受動文を形成する他動詞の能動態・受動態の体系的実現、主体活用(あるいは稀に主体・客体活用)原理に則る動詞活用のような、明らかに主格構造の特徴が見られること、これは特に、全ての時制系列の他動詞述語構文に能格式構文(本稿上述参照)を一般化するインド・イラン諸語に認められるという。したがって、「インド・イラン語の権威ある研究者の結論」は、「インド・イラン語は如何なる場合にも能格言語とは看做し難い」(p.192)というものである。例えば「典型的にあるいは『完全に』能格言語と認定されている」シナ(шина)語(ダルド諸語東群)について、他動詞の態弁別形の規則的対立、純粋な主体系列の動詞人称接辞、名詞曲用に見る主格と一般斜格の体系においてこの一般斜格は能格が有機的に持つべき主体機能を欠いていること、属格、与格のような主格構造の各機能を果たす後置詞の存在、等のような特徴を挙げて、この言語を能格言語と認定すべき根拠はない、としている。インド・イラン諸語には能格構造の特徴総体(комплекс)がなく、「能格性」の特徴は部分的なもので、「形態的」なものにすぎないという。通時研究も、「現代インド・イラン諸語の類型的進化の主流が、能格式要素ではなく主格要素の比重の増大である」(p.193-194)ことを示している⁵⁵。また、「インド・イラ

⁵⁵ cf. インド・イラン諸語の動向については、「新しい言語類型学」(三省堂 p.212-213)にも同様の指摘がなされている。一方、「能格性総論概説」(Очерк общ. теории эрг., 1973, стр.32)では、インド、ダルド、イランの諸語について、これ等の言語の「資料は、能格構文の生成の歴史も衰退の歴史も記録実証しているという意味で比類なきものである。最近の研究に照らして、……それぞれの文モデルの能格性に疑念を差し挟むべき根拠はない。ビレイコの確認によると、『現代インド・イラン諸語の能格構文には、典型的な能格諸言語に特徴的な形態的形式と統語的構文間の相関性が認められる』」としている。また本書では、同じビレイコから、「インド・イラン諸語の能格構文の特

ン語の能格式構文の起源は、決して能格構造の代表言語の然るべき過程が行き着くような動詞語彙素の歴史を反映するものではなくて、結局は -ta 表徴を持つ完了分詞の、他動詞能動形としての再解釈によるもので、それは一連の音声学的改新の中で可能となったものである」(p.193)、という。「インド・イラン諸語のこれ等諸事実と能格性一般理論の基本的立場を簡単に対比すれば、この言語が主格組織から能格組織への通時的変換性を裏付ける経験的証拠とはなり得ないこと」(p.194) が判明する、と。

ポリネシア諸語。能格性を二次的現象と見るか一次的現象と見るかを巡って正反対の説がある。今日では非生産的な動詞派生モデルに現れる -Cia (C=子音音素記号)を他動詞の受動態の古形マーカーと見るかどうかという議論である。クリモフは、自分がオセアニア語学に疎遠であるためこの議論の何れかを取るリスクを冒す訳には行かない、と断った上であるが、受動態古形と見る発想が 30 年代にすでに克服済みの能格構文受動性説に立つ議論つまり主格構造のプリズムを通して能格組織を記述するという議論であるという印象を受けると述べる。そして、活格動詞の非遠心形の古い指標と見る歴史的解釈の可能性の検証を提案している。ここではまた、古層の主格言語に受動構文の生成を仮説すること自体は、実は能格構造から主格構造への周知の類型的再編過程に見られる、能格の主体機能と間接客体機能（特に具格機能）への分化＝主格と具格の形成を拠り所として受動構文の必須成分たる具格の存在を主張しており、これは看過できないことだ、としている。何故ならば、具格なしの構文は元の能動文の受動変形とは認められないから、「過去となった主格構文」の存在を証明できないからである。そしてこの様な格の発展事情は、例えばナフ・ダゲスタン諸語の場合も同じだと述べている（原能格指標 *di- の現代の継承はほとんど具格機能を欠く一方で、祖語には再構されない専用造格を発展させているという⁵⁶）。要するに、具格の発展は二次的なのである。

続いて、具体的な資料を基にして主格言語から能格言語への再編を主張する三つの研究－ヘイルのオーストラリア諸語研究(能格構文が受動構文に近似するという主張)、シルヴァーシュタインの北米チヌーク語研究(分離能格組織を基にして能格組織の形成を構想する)、ハリデーの英語研究(英語では 100 年以上も前に主格型と能格型が融合し、能格的要素の歴史的二次性を主張)－に言及している。またアンダーソン説(主格マーカー -s と対格マーカー -n を持ち中立的な VSO 語順を持つ言語において、音声学的な法則性によって文末の語末子音が脱落すると、能格 -s と -ø [ゼロ語尾] の能格言語に転

徴の一つは言語構造におけるその脆弱性である」を引用している (p.194)。

⁵⁶ cf. 「能格性総論概説」(Очерк общ. теории эрг., 1973) стр.187, 189

換する可能性を主張する)や、これよりは「はるかに慎重な」トラスク説(主格構造の受動構文を基にして能格性が発生するとする)も紹介している。これら能格性の形成に形式的説明法を加える論者達の「仮説の基本的な誤りの理由を簡単に定式化すれば、……言語構造諸要素の機能面を考慮していないことと特徴付けるべきであり」(p.198) (たとえば、形態的に能格を仮説しても間接客体機能も含む能格性を考慮しない等)、また彼等の特徴は「能格構文の生成だけに限って説明しようとする傾向であり、絶対構文の発生問題を無視することである。……言語における能格性の起源を解明する試みで正当化を主張する全ての試みは、必然的に絶対構文の生成の説明を行うことを前提としている」(p.199)。クリモフの弁を一言でいえば、それは体系性の重視であろう。すなわち能格性の証明または活格性、能格性、主格性間の相関性の歴史的解釈にはそれらの体系性の証明が前提であり、したがって原子論的事象ではなく体系間の相関性の証明が前提だ、という点であろう。

不可逆的發展という点に関連して、「如何なる發展も、その内容の別なく、ある段階が別の段階の否定であるような一連の相互関係を持った多段階發展として示すことができる」(マルクス)の引用に次いで、前書で引用した言語学者ステパーノフ、ヂャーコノフ、トロンスキー、コロストフツェフ等の発言を再度紹介しながら⁵⁷、言語の類型的發展に一定の段階性があるという考えが方法論的に正しいことを強調している。また国外の言語学者イエルクスレウ、ボンファンテ、バンヴニスト等の「同様のレヴェル」の発言に言及しながら、言語の類型的發展の段階性説が「一見考えられているよりはるかに広く国外の言語学に広がっていることを強調」(p.202) している。

最後に、経験的事実ですでに明らかになっている、活格組織の發展における能格化と主格化という二方向性について、これを如何に理論的に説明するかという問題に触れている：「現在では予見し難い内容の理論的裏づけが必要である」(p.202)。前書でも、二つの「再編方向を裏付けるための具体的な前提条件は十分に明らかになっていない」⁵⁸、と述べている。ただし、「先行研究の一つで、このような構造的二分化が、動詞活用の単人称的 *одноличный* な性格によってあるいは二重人称的 *двухличный* な性格によって惹起される可能性があるという考えを述べたが、これは現象の形式的特徴に頼っているため、内容類型学的な説明の精神そのものを応えるものではないと思われる」(p.202)⁵⁹。

⁵⁷ 「新しい言語類型学」(三省堂) p.245・246

⁵⁸ 前掲同書 p.259

⁵⁹ cf. 前掲同書 p.161, 185・186 他

この問題の解決の鍵は、「いくつかの種類の後期活格状態の再編の全体的な構造環境全体の研究」を総合することにより、「この面で、後期活格状態の二重進化の個々の結果の研究を提示することが一定の関心と呼ぶはずである」(p.203)。

そのような個々の結果の中で挙げるべきものとして、特に有機的所有(非分離所有)と非有機的所有(分離所有)の形の二つの方向に注目している。後期活格言語を代表する多数の言語には、この名詞形における両範疇の対立を払拭して行く過程が立証され、その場合有機的所有の関係を活格動詞の非遠心相(求心相)指標によって伝達し得る過程が観察されるという：例 北米ヒダツア語 wakeo (人) ki-aara-ikao-c (非遠心相接頭辞 ki- 一手 aara- 見た)「人が・自分の一手一見た」(человек свою//себе руку увидел)⁶⁰。また、能格型代表言語は、この名詞所有形のこの対立機能を長期に亘って保存する傾向があるのに対して(いくつかのアプハズ・アディグ諸語、ブルシャスキ語、ポリネシア諸語、アルゴンキン諸語等)、主格言語では(カルトヴェリ諸語、エニセイ諸語、ケチュマラ諸語等、活格型言語との構造的接触を示す主格言語も含めて)、名詞形にこのような対立を残していない。また、主格言語では他動詞の態(voice)の区別が現れるが、能格言語ではその区別はない。したがって、結局のところ、このような分化は、活格動詞の相 (version) 的ディアテシスの運命の違いによる可能性がある：「能格言語に始まる動詞の相 (version) 的ディアテシスの完全弱化は、名詞の有機的所有と非有機的所有の形の対立を長期に亘って保存することを促すのに対して、この相の対立を次第に態 (voice) 的ディアテシスに転換しながら保存して行く主格言語では(これは恐らく印欧語にも起ったであろうが)、こうした関係はその後動詞語形で伝達され続け、それが名詞形態におけるこのような対立の中和化を加速することになる。この場合、他動詞の語形の態的区別を知らない主格言語の一部は、歴史的に能格的状态を体験することになった、と推定して当然である」(p.203-204)⁶¹。前書で、「活格性の様々な包含事象がその基本的な構造的地位を失っていく時に、一時的により副次的な地位に収まるため、そのことがいわゆる代償的發展という印象を与えるような、そうした変化図式が最も特徴的と思われる」と述べていることも、このことに関連していよう⁶²。

この活格動詞ディアテシスの改新問題にも関連するからであろうか、あらためて、ど

⁶⁰ cf. waceo (人) waceo (人) aara-ikao-c (手一見た)「人が・人の・手一見た」(cf. 前掲同書 p.162, 166)。

⁶¹ 前掲同書 (p.167) に同趣旨の説明。

⁶² 前掲同書 p.210-211 ; cf. 全体として活格構造の類型的再編を扱っている。同書第4章「通時態における活格構造」。また「能格性総論概説」(Очерк общ. теор. эрг.) p.254 他、第4章「通時態における能格性」。

の類型組織でも文の構造的支配要素、構造核となるのは動詞語彙素であることを証明しており、通時的变化においても動詞型形態タイプこそ歴史的優先性(примат)を持つこと；類別言語が名詞形態の発達に欠如しているのだから構造核は動詞語であり、その構文は常に動詞型だけであること；また動詞型とは、動詞述語の語形に当該言語類型の意味的定位を完全に集中する型であること；それ以外の諸類型には、動詞型も混合型も名詞型も存在するが、混合型形態タイプは、進化面の事情で動詞の語彙化原理そのものに改新が始まり、当該類型特有の動詞への意味的定位が鮮明度を失い始めるため名詞にも代償的にその機能負担を課すタイプであること；名詞型形態タイプは、動詞の語彙的性質の再編が限界を越えて奥深く進行してしまった類型の意味的定位を専ら名詞が負うようになる最も遅い段階位相に属するタイプであること、を確認している。

その上で、人類史における言語の段階的発展過程について次のように結んでいる：「諸言語の構造的再編過程の底流には、当然考えられるように、内容類型学内に仮定される言語諸類型の意味的決定因子(семантическая детерминанта [semantic determinant])そのものの交替過程が存在するのである。諸言語全体(とりわけ「混合」型の代表言語)の歴史の考察が証明していように、この非常に長い過程は、決してある類型の特徴が別の類型の特徴に何か機械的に取って替るということではない。むしろこの過程は、劣化衰退する組織と発展して行く組織の意味的決定因子の対立の弁証法を反映するものである。長期間にわたって、形成されつつある構造の意味的決定因子と共存しながら、以前の決定因子は言語構造の一定の連鎖環に著しい影響を及ぼし続けるのである。この場合、この対立を最も典型的に反映するのは、歴史的な先行構造のあれこれの特徴が言語構造の中核環における支配的な地位を失い、一時的に構造の周辺部に張り付くような発展過程である(特に言語史にかなり多数見られる、あれこれの現象のいわゆる代償発展の事実はこのことによって説明される)。正にこの発展モデルにおいて重要な地位を占めるのは、上述の、語彙的な現象と統語的な現象の、形態的現象への転置過程である」。

本書の読後に残る強い印象は何よりも先ず、言語類型学は歴史科学の一である、という点である。一方、本稿筆者には、今日のロシアにおける言語学動向はこの点の自覚を一挙に失いつつあるのではないか、という感触がある。一言でいえば、好きにつけ悪しきにつけ、欧米化、「国際化」である。本書中のクリモフの弁を借りてその「新しい」気風を特徴付けるとすれば、歴史を捨象した「二者択一的な」問題解決への傾斜であろう。恐らく今やこの新しい動向の旗手と目されるキブリクによれば、能格性は多様であり、

能格規範を厳密に (жестко) 守る類型種 (ナフ・ダゲスタン諸語)、時制間分裂を示す種 (カルトヴェリ諸語、インド諸語)、逆受身変形を可とする種 (チュクチ・カムチャッカ諸語、オーストラリア諸語)、さらにまた S=A ピヴォットを可とするあるいは不可とする種、等々があるという。その上で、「能格構文を持つ全ての言語の原理的な統語的類似物 подобие を前提とする『能格構造 эргативный строй』という従来の概念は、自然言語の資料の経験的検証に耐え得ない」、とする⁶³。能格性諸現象は認めるが、構造体としての能格性を拒否するのである。こうして形態と統語等をバラバラに解体した上で諸言語相互間の機能分析を行ってその多様性を示すが、歴史は完全に抜け落ちており、弁証法の視点は消滅している。クリモフとの共著「カフカース諸語類型学」(1980)、「カフカース言語学概論」(1986) もあり、ナフ・ダゲスタン諸語の研究者であるアレクセーエフの論文「能格論における包含事象の概念によせて」でも、「総体系派 целиносистемное направление」に対置して「いわゆる部分系派」(так называемое парциальное направление) とかの方法論の採用の利点がことさら強調されている⁶⁴。それら部分、細部については、勿論、今後、内容類型学は個別言語学等と連携しながら埋めていかなければならない。これ等の諸点については、稿を改めて論じたいと思うが、類型種とりわけ能格言語類型種も多様であることをクリモフ等が承知していなかった訳ではない。そのためにこそ「類型」概念の確認が必要であった。クリモフが提示して見せたのは、正に多様な諸言語間の横断的な大きな連続的相関性と人類史における大きなスパンの不可逆的言語変化の相対的な概略図、鳥瞰図、スキームであり、また言語研究における大きな指針＝弁証法的視点であった。言語研究が陥りがちな「原子論的」視点に対する強力なアンチテーゼである。少なくとも現時点において、活格性、能格性、主格性の認定が学史上の試練に耐え得ているということ自体が、内容類型学の大きな力量と説明力を証明しているのである。

⁶³ cf. А.Е. Кибрик, Константы и переменные языка, Алетеия, 2003, стр.127, 129 他

⁶⁴ М.Е. Алексеев, К понятию импликации в теории эргативности — в кн.: Язык, теория, история, типология, Эдиториал УРСС, 2000, стр.274-279